
なのは一途のはずがどうしてこうなった？

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

【Nコード】

N7866Z

【作者名】

葛根

【あらすじ】

高町なのは一筋の主人公だが、何故か共有物扱いに追い込まれる。

本命の高町なのはを筆頭にどこかおかしいヒロインたちが紡ぎだす物語

プロローグ（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

プロローグ

高町なのは達との初めての出会いは約10年前だ。

管理局の訓練学校で同い年。

それだけの理由で話しかけられた。

当時の年齢でランクAAAクラスの魔導師は珍しく、高町なのは達は異常であった。

されど、ミウラ・ケイタもまた、異常な人物である。

ミウラ・ケイタは管理外世界の住人であった。

だが、高町なのは達の話聞けば聞くほど、似た世界で生まれ、育った。

第97管理外世界「地球」が高町なのはの出身である。

一方、第48管理外世界「アース」がミウラ・ケイタの出身だ。

文化レベル。魔法の有無を含めて極めて似た世界であった。

それらを話の種に互いが語り合い、仲良くなったのは当時の年齢から男女の区別の意識が低くまた、同年であることから、友人となるまでに時間は掛からなかった。

そして、極めつけはミウラ・ケイタの保有する魔力量であった。

ランクこそ彼女達に劣るものの、魔力量は彼女達の総合魔力量を超えていたのだ。

さらに、レアスキル持ちである。

それは、魔力供給だ。

ミウラ・ケイタは高町なのは達の同期に比べ、出勤回数が異常に多かった。

その理由として魔力供給と魔力量の組み合わせからなる補助の役目を担うという役割を持っていたからである。

つまりは、補給物資扱いだ。

だからこそ、本来のランクとは関係なしに、危険度の高い任務や、災害救助などの事件を多く経験することになり、それがミウラ・ケイタの戦術、戦略眼を育み、成長させ、開花させる要因となったのだ。

奇しくも10年間と言う歳月の殆どを現場から学び、生き延び、時には役に立ち、戦い続けた事で彼の経験値は膨大なモノになった。そして、現場での役割を一旦終え、というか、ギブアップして。ある年から教官を目指す。それは、管理局員の若手育成を目的とした戦技教導官であり、戦術講師であり、現場において生き延びる術を教える立場になるうというものであった。

何故、教官なのか。

それは、安全だから。そして、楽しんで仕事をしたかったからだ。

そんな半端な思いで受けた戦技教導官試験は見事に落ちて、同期の高町なのは一発で合格した。

結局、高町なのは遅れること3ヶ月後、二度目の試験で合格を掴みとる。

彼女は忙しい中、ミウラ・ケイタの試験対策に時間を割き合格時にはきちんとお祝いをしてくれたのだ。

その時からだろうか。

彼が彼女を意識し始めて、彼女が彼を意識し始めたのは。

互いに奥手であり、忙しくなった為会う時間が減った。

そんな中でも月に一度は二人で食事に行ったり、洋服を買いにいたり青春らしい青春を送り、ついに男のほう告白をしたのだ。初めてのキスは18の時であった。

互いが意識し始めて3年の月日が経った頃の話である。

しかし、相手はエースオブエースの称号を持つ管理局の人気者だ。

交際は秘匿するものであると男は説得する。それに、渋々了解をした彼女は怒りもしたが、自分の為という事も理解していた。互いに男女として認め合い、相思相愛の関係だ。自然と肉体的な欲求が湧き上がり、そういう行為をしようと決心して、日にちまで決めた。いざ、行為をしようという雰囲気が高町なのはの部屋で求め合ったのだが、どこからかその情報がリークされており、秘匿されていたはずの交際がフェイト・テストロッサ・ハラウン、八神はやて一同の寝室突入という形でバレってしまったのだ。

「申し開きは？」

言及するのは高町なのはの親友であるフェイト・テストロッサ・ハラウンである。

彼女は表面上は怒っていないように見えるのだが、長い付き合いのミウラ・ケイタにはその内情が手に取るように理解できた。それは、つまり怒っている。

「えー、秘密にしていたことは申し訳ない。だけど、真剣交際！
そう！ 真面目にお付き合いをしています」

「機動六課立ち上げ前にスキャンダルは困るわ」

苦笑いの八神はやてもやはり、表面上はいつも通りだが、怒っていた。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。秘密にしていたのはごめんだけど、ケイタが言う通り、清いお付き合いを」

「嘘！ だって、その、しようとしてたじゃない！」

顔を赤らめ叫んだのはフェイトだった。

「その、なんだ。まだ未挿入だったから良いじゃないか。テスト口
ツサ」

シグナムは味方らしい。

「どうだかな。隠れて付き合ってたんだ。一回位してんじゃねーの
？」

幼女体型の赤い格好のヴィータが容姿に似合わない発言をする。

「でもでも、ゴムも準備してましたし、日付的にも安全日ですよ」
医学的見地から意見するのはシャルル先生だ。彼女はどこかずれて
いる気がする。

「……」

俺以外の唯一のオス。ザフィーラは沈黙を守ったままである。

「と・に・か・く！ そういう行為はお預けや！」

激を飛ばすはやてにヴォルケンリッターは頷く。

夢にまで見た初体験はタヌキ同盟に阻止されてしまった。

後日解ったことはなのはのスケジュールと俺のスケジュールをハツ
クして閲覧したのはリインフォースだったということだ。

子供を過ぎ大人の階段を上がる。
友人はそれを阻止し足を引っ張る。

配点：（謀略）

なのはの意見が多かったので勢いで書いてみた。

基本的にギャグ方向に走る。

シリアス？ 何それ美味しいの？

更新は不定期。続くかはしらん。

プロローグ(後書き)

誤字修正

第一章 謀略と方向性（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第一章 謀略と方向性

男女の仲を意識した上で肉体関係を結ぶはずが失敗に終わった。

互いに若く、欲求に素直であった。

一度の邪魔でめげるような精神を持ち合わせていない。

不屈の精神の持ち主である高町なのはは再度の密会を求めたのだ。

『今度私達が会うときにはちゃんとしようね』

フエイト・テストロツサ・ハラオウンは長年の友人に疑惑を持つ。

好きな人ができたらお互いに教えあおう。

それを破ったのは他ならぬ高町なのはであった。

その約束はまだ互いが幼い頃にしたものので時効があるのなら既に時効を迎えていると思う。

それに、私も約束を破っていた。

高町なのはの恋人であるミウラ・ケイタが好きなのだ。

それも、出会ってから直ぐの事だった。

私と同じで両親がおらず天涯孤独の男の子。

明るくて優しく初めでの異性の友だちだ。

執務官試験に落ちた時は一緒に悲しんでくれた。

過去問題や傾向と対策を彼が集めてきてくれた。

それでも、試験には二度落ちた。

二度目の時は慰めてくれた。

『諦めたら終わりだ。だからさ。落ち込んで、一番下まで落ち込んで』

だらあとは上がってくるだけだよ。それに、頑張っているフェイトの事、尊敬してるんだぜ?」

三度目の試験で合格した。嬉しくて嬉しくて、泣いた。

『すげーぜ! よっし。祝いだ! ケーキパーティーだ』

義母のリンディ・ハラウンと義兄のクロノ・ハラウンとなのは達を集めてくれて、お祝いパーティーをした。

その時、私は彼を好きだと感じた。

本当の家族がない彼は祝う事があっても祝われる事がない。

私が家族になつてあげると。

言いたかった。

それが好きの始まりだった。

だが、今の今まで好きと言えなかった事に後悔をした。

「だって、恥ずかしい」

自分から告白するのは。

だから待った。それがいけなかったのだ。

ならば、

「振り向かせる。それとも、う、奪う?!」

妄想だ。落ち着こつ。

恋愛経験のない自分ではわからない。だから聞こつ。

「バルディッシュ。どうすればいいと思う?」

『既成事実を先に作ってしまえば男というものは責任を取ると判断できます』

長年付き添ったインテリジェントデバイスの判断だ。
恥ずかしいけど、それが正しいはず。

「それは、つ、つまり。え、えっちな事をなのはより先にするって
事？」

『イエス、マスター』

フエイト・テストロツサ・ハラオウンの間違いは、機械であるデバ
イスに解答を求めた事でありそのデバイスもまた効率を求める機械
であった。

つまり、効率的に相手を倒す事を示すデバイスは、

『ユー、やっちゃんよ。特に大切なのは避妊具を使わないことだ
ぜ。マスター？』

妊娠という最大の結果を周りに理解させることがマスターの求める
女の勝利だと導いたのだ。

八神はやては己が従えるヴォルケンリッターを招集していた。

「会議や！」

激を飛ばす。

「出遅れたで！ まさかなのはちゃんがミウラっちとお付き合いを
しているなんて恥やで！ なあ？」

八神はやての予定は崩れた。

本来なら機動六課にミウラを入れて上司権限であんなコトやそんなコトをしようと策略を練っていたのだが思わぬ失態をした。

「しかし、主よ。あの二人が本気で付き合っているのなら身を引くべきでは？」

烈火の将、シグナムが正論を言う。

「アホか！ シグナムがミウラっちでオナってんの知ってんねんで?!」

「な、何故ソレを！」

烈火の将は顔を烈火のごとく赤くした。

それはプライベート侵害！

「リインは何でも知ってますですー」

よおし潰そう。プチっと潰そう。管理人格だろうが、プライベートは守られるものでなければいけないはずだ。

「ちなみにシヤマルが一番回数が多くて次にシグナムで最後にヴィーたちちゃんですー。この淫乱豚どもですー！」

自分と同じ境遇の人物がいて安堵する。

よかった自分だけじゃない。

こんなに嬉しいのは久しぶりで涙がでる。

「そーゆーわけで、皆ミウラっち好きなのは知ってんねん。だから、手に入れるのは当たり前やろ？」

「はやてちゃん。何かいい手があるの？」

シャルが顔が赤いまま聞いた。

ヴィータは俯いている。ダメージが大きかったようだ。

「最終手段や。既成事実を作る！ やってしまえばこっちのもんや」

「主はやてよ。そ、それはつまり、どうゆう事ですか？」

聞く。

まだ主と呼ぶ辺り私は忠実な騎士だな。

「アレだ。はやての隠してる本にあった逆レイプってやつだろ？」

ヴィータ！

どこでそんな風に染まってしまったのだ？！

「ぐっ。私の秘蔵の本を……。まあええ。不問や。実際、ヴィータ

の言つとおりミウラっちを襲うんや」

「はやてちゃん、それって犯罪じゃ？」

シャルが不安に思っている事を告げた。

「大丈夫ですー。女性から男性への強姦被害は通報される方が少ないですー。もし通報されても、もみ消す準備は万全ですー」

「そういうことや。機動六課設立とミウラっちを逆レイプするとい
う任務。大変だとおもっけど。頑張つてやー！」

「はい！」

女達の声が重なる。

置物となっていたザフィーラはミウラの身を案じ静かに思った。

もげろ、と。

決心と覚悟

己の運命が知らず決まる

配点：（被害者）

原作崩壊がこれほど楽しいとは。
キャラがおかしくなってる。

だけど後悔はしていない。

今後も崩壊キャラがでますので、原作を大切に思う人はここらで読むのをやめてください。

注意はしました。

第二章 人事異動と恋人（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第二章 人事異動と恋人

若干19歳でありながら歴戦の英雄達と出動回数が並びつつある人物がいる。

伝説の三提督の一人は言う。

『私の若い頃でもあんなに使い回される奴はおらんかったよ』

さらにもう一人は、

『確かに。しかし、本人も満更ではなさそうだった。実に勤労者だ。若い子はアイツを見習え』

最後の一人は、

『そろそろ我等に戦歴が並ぶんじゃないかね？ 威厳が弱くなりそうだから人事で教官にしようぜ。アイツ、戦術と戦略眼は我等に並ぶ勢いだもん。若い奴に負けたくないんだからねっ』

つまり、本人の望みと上層部の望みが一致したのだ。

人事異動通達。

お前、生意気にも戦歴がすごいから教官にしてやんよ。

エースオブエースと同じ教導官な。あれ？ 資格もってんの？ お

い！ 人事なにやってんの？

まあいいや、人事異動命令ね。

エースオブエースと協力して精鋭を育ててね。　ここマジな。
あと、エースオブエースはマジ怒ると厄介だから怒らすなよ？　絶
対だぞ！

追記

機動六課頑張っつね。

三提督一同より。

え？　これ、マジ？

人事部に緊急で呼ばれて来てみれば伝説の三提督から勅命で人事通
達が届いていると人事の女の子が慌てて、でも内容みて俺が吹いた。

「ミウラさん。伝説の三提督からの人事通達なんて前代未聞ですよ
?!」

人事の女の子は俺と同じ年位である。あの伝説の三提督からまさか
の指令だ。

一般的な管理局員には雲の上の存在だ。

「そうらしいね。俺、教導官だつて。前々から申告してたのが通っ
たと思つて死力を尽くします」

敬礼。

人事の女の子は慌てて返礼。

「あの、サイン下さい。ファンなんです。最新刊買いました」

そうやって最新刊である『訓練生の苦難』を胸の前に出した。ささっとサインを書いて

「購入どうも。今後も難シリーズをよろしくね」

「はい。ありがとうございます」

立ち去った。管理局員でサインをしたのは何人目だろうねえ。数えきれない。

自分の体験した訓練学校時代をフィクションにして物語を作って某出版社に出したら佳作扱いで受賞して、そこから難シリーズが意外に人気がでたな。

趣味で書いた物語で思わぬ副収入を得ているので金はある。

だが、暇がない。だから現場から教える側に移動したかった。

今回の人事は渡りに船だ。

特になのはと一緒に仕事ができるのが嬉しい。

人事で良かったと思える日だ。大ファンである作家が目の前にいたからだ。

訓練生の困難、訓練生の至難、訓練生の苦難と続く難シリーズと一般的には呼ばれている書籍だ。

さらに、射撃の心得、体術の心得、空戦の心得、陸戦の心得と続く心得シリーズの著者でもある。

どちらも管理局員を中心に人気が出て一般書店にも並ぶ様になった書籍だ。

作者のミウラ・ケイタさんに会えた。サインを貰った。

写真が取ればよかったんだけどさすがに仕事なので自重した。

顔は悪くない、むしろ良い方だと思う。

思った通りの人柄で良かった。

後で皆に自慢しよう。

「うっす！」

「アレ？ ケイタじゃないか。無限書庫に何か用？」

ユーノ・スクライアだ。

彼は管理局の七不思議の一つ。というか疑惑がある。

実は女の子なんじゃないの？

だがそれは確認済みである。

「なに、お前の顔を見に来た」

「ふーん」

薄い反応である。

理由は明白で、彼が男である証明に股間を握った時から親友から友人へ降格したのだ。

それに、同人活動でユーノ・スクライアが犯されまくる物を同人即売会で発売した事がバレた辺りでかなり怒られた。

でも、その年の一番の売上だった。

「まだ怒ってる？」

「そりゃね。僕がBLの主人公で性欲を排除する糧になってるんて知らなかったからね！」

半年も怒ってるんてケツの穴の小さいやつだ。

まあ、そのケツも今では一部に狙われているとかで申し訳ないと思う。

「謝つたる？ それにエロデータ上げたじゃん。何？ 今度は合コンか女の子紹介すればいいの？」

「そついう問題じゃないよ！ 僕を女装させたコラとか完成度高すぎだよ！ 未だに後輩に『ユーノさんって女の子なんですか』って聞かれる気持ち君にわかる？ わからないだろ？ 次やったら絶交だからね？」

うむ。

「マジすまん。でもお前の顔だったら勘違いする。もっと男らしい格好すれば？」

「はいはい。じゃあね。仕事だから。君も仕事あるんだろ？ こんな所で油売ってないでさつさと戻れよ」

今日も許してくれなかったか。今後は自重しよう。ユーノを怒らせると怒り期間が長いからな。

偶然。たまにあることだが管理局内でなのはとぼったり会った。

「帰り？」

「うん」

なら一緒に帰ろうとなるのは恋人同士なら当たり前の事だ。

「人事で今度からなのはと一緒の職場になるよ」

「ほんと？ そつかあ。やっと人事通つたの？」

以前から一緒に働くために人事に申請を出していたことを思い出し

たように聞いてきた。

「まあ、そんな感じ。で、今日この後どうする？」

それは肉体関係を結ぶかどうかの問いである。

「ホテルにしよう。やっぱり部屋だとフェイトちゃんとかまた邪魔して来そうだしね」

「わ、わかった」

気迫のこもった表情だ。それに若干赤い顔だ。

きちんと確かめたい。そして繋がり合いたいと思う。
だからこそ、

「これからもよろしく」

「うん！」

お願いした。

期待するのは職場か行為か。

配点：（恋人）

前回注意したので苦情等受け付けません。

あと、時空系列的には機動六課立ち上げ前です。

まあ、あまり気にせずに。

そのうち戦闘とかあるはず。たぶん。

第三章 結びと親友（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第三章 結びと親友

ホテルと言つても様々な種類のホテルがある。

高町なのはが選んだホテルは所謂高級ホテルであつた。

レストランで食事をして、そのまま宿泊になる。

表向きは今後の教導官同士での語り合いである。

仕事である以上領収書を切るのだが、その辺りが高町なのはの小狡い所であつた。

さらには、昨日高町なのはの友人たちに釘を刺されたのにも関わらず翌日にまさか約束を違えるとは思ひもよらなかつただろう。

だからこそ、二人きりでホテルに外泊できたのである。

事の始まりは高町なのはからであつた。

唇を求め合う。

唐突ではあつたが、そういった行為をすると約束をしていたので応じた。

お互いに管理局から支給された制服であつたが、それはすぐに無くなり互いに生まれたままの姿になつた。

息を呑む。

「綺麗だ」

それが男の感想であつた。

女性の身体という物を初めて直視したのだ。

「明かり消して、恥ずかしい」

薄暗い光の下の一つのベッドで重なりあう。

互いに初めてである。

それでも、男の方がリードする。

知識だけは人一倍あると自負する男は女の身体を喜ばせる事にした。完全に受けるだけの女は初めての性感に不安と喜びがあった。

興奮した男の物を薄暗い中初めて直視する。

思った以上に大きい。

そして逞しいと感じる。

だが、愛おしいとも思う。

手と口だ。

互いに刺激しあう。

初めて異性に触れられた同士達するのは早かったと言える。

それでも回復は早かった。

互いに準備は万全でついに互いの初めてが繋がったのだ。

「痛くない？」

「うん、大丈夫」

涙した。それは嬉しさと痛さが交わったもので悲しいものではなかった。

二人は実感する。

繋がり合うことの愛おしさと快樂に心まで浸されて満足できるのだ。

朝帰りだ。

高町なのはは自分の中に残る痛みと確かな心の温もりを感じて満足気に自室に戻る。

時計の針は5時を示しており、自室で寝ているはずの親友を起こさない様に静かに扉を開いたのだ。

「げ、フェイトちゃん？」

「おかえり。なのは。随分遅い帰りだね」

高町なのはとフェイト・テストロッサ・ハラオウンは10年来の親友である。

その親友の感情が読めない。

無表情を貼り付けにした顔が怖いと思った。

「ち、ちよつとお仕事で、話が長くなってそのまま外泊しちゃった」

「ふーん……。その話し相手って誰？」

正直に答えるべきか誤魔化すべきか迷う。

これ以上嘘を重ねるのは心苦しい。

「えーと、ケイタ君と、仕事の話……」

「それって二人きりで、しかも高いホテルで、一緒の部屋で！
泊まって！ することなのかな？」

激昂だ。

だが、

「でも、結ばれた事をお祝いするのが親友かな？」

泣かれた。

どこで私達の情報を手に入れたか気になるが目の前の人物を落ち着かせないといけない。
情緒不安定だ。

「落ち着いて、フェイトちゃん！」

「私、落ち着いてるよ？ だからね、お願い聞いて？」

明らかに落ち着いていない。

だから相手の言い分を聞こう。

「な、何かな？」

「なのは私達との約束を破って裏切った。だから私も裏切っていないよね？」

何を？ と聞こうとしたが、

「今度の休み。ケイタ君貸して？」

無表情のまま告げられた。

「目撃情報と、ホテル側の顧客情報から間違いないですー」

八神はやては報告を聞いて頂垂れた。

まさか約束を翌日に破られて、さらに膜まで破られているとは。

「さすが、エースオブエースや。名実共に誰よりも先にいきおる。こっから先は戦争や！」

それはつまり、

「手段、場所を選ばず、犯せ」

勝てば良いという目的のためには手段を選ばない卑劣な手だ。

「しかし、主はやてよ。私達が先に、その、してしまってもかまわないのか？」

「かまわへんで。何故なら、ヴォルケンリッターは私の所有物扱いや。それを理解しているミウラっちは事後、必ず私の元へ来る。すいません。貴女の物に傷を付けてしまいましたと。そこでや！私は優しく答える。別にいいんや。男女の仲なんてどうなるかわからへん。でもな、責任をとらないかん。わかるな？ 私の言うこと一つ聞けば許したる、と」

「で？」

興奮した様子の主に問う。

「それでや。ミウラっちは言うことって何と聞く。それは、私を娶ることや。そうすれば万事解決。所有者を妻にすればそれに連なるヴォルケンリッター付きや。愛人3人やで？ お得パツクや。これに乗らん男はおらへんやろ?!」

ああ、そうか。主はやてはバカだ。

「はやてちゃん自体が攻めに行ったりしないんですか？」

シヤマルがバカに問うた。

「は、恥ずかしいやん」

頬を朱に染めて顔を押しさえる手は可愛らしいのだが、

「何を今更。はやて。私が一緒について行ってやるぜ」

ヴィータもバカだった。彼に幼女趣味があるかは知らないが、ヴィータは結構可愛がられている。だからこそ近づきやすいと自負しているのだろう。全く。

私は剣術指南役で明日彼と会うというのに。忘れているみたいだ。それに言う必要ないはずだ。一番槍は私が頂くとしよう。

男女は大人の階段を駆け上がる。結ばれた絆。刻まれた傷跡。

配点：（契）

セーフなはず。

あと、エロ描写に抵抗がある人はすまんね。読ませておいて謝罪とか作者は阿呆だな。

第三章 結びと親友（後書き）

誤字修正

多いな。

気をつけます。

第四章 烈火の将は実力派（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第四章 烈火の将は実力派

烈火の将と言えば管理局でも名高い近接戦闘の達人である。

その彼女は人に物を教えると言う行為が苦手であり基本的には新人に教えることをしていない。

しかし、模擬戦の訓練を頼まれば受ける位の気概は持ち合わせている。

シグナムと交流を深めたいと思う下心のある男性局員は初め狂喜した。

だが模擬戦訓練は決闘という名であり、完膚なきまでに相手を叩きのめすシグナムに訓練を願う局員は激減した。

今ではミウラ・ケイタとエリオ・モンディアル位しか訓練という名の決闘を申し込む相手がいないのだ。

何故ミウラ・ケイタが剣術指南役としてシグナムに訓練を頼むかというと、それは生き残るためであった。

彼は決して強いわけではない。

総合ランクはAランクだ。

保有魔力量が平均値を底上げしているため総合的なランクはAなのだが、個々で見ると平均Cランク程度である。

それでも数多くの戦歴を持つため戦い方自体は巧いのだ。

後方支援が彼の役割だが、各ランクを高める事に必要性を感じている。

それは彼一人が取り残された状態でも生き延びる術の獲得のためだ。まずそんな状況は起こりえないが、万が一という事がある。ならば、不測の事態に対応するためにも様々な技量の確保は必然であった。

その一つが剣術であり、近接戦闘の技術であった。

「筋はある。だが、防御ばかりが巧くなっても話にならんぞ」
「仕方ないよ。身を守る前提で習ってんだし」

互いに握るのは木刀である。だが、身につけているのはバリアジャ
ケットだ。

これは訓練であり殺し合いではない。
だから、デバイスを使う事はないのだ。
それでも実力差は明らかだ。

「ケイタは見切りがいいが、攻撃がなっていない。身を守るなら敵を
倒すのが一番だ」

ピンクのポニーテールが揺れる。
横払いの剣筋だ。

「そう、ここで避けたなら相手に隙があるだろ？ ソコを突け」

言われた通りに突く。
が、返す刀で弾かれる。

「と、まあ、私くらいになると返し技が間に合ってこうなる」

喉元に木刀の先が突きつけられた。

「降参だ」

負けを認める。初めから勝つことが目的ではない。

「うむ。だが、落ち込むことはない。負けない戦い方をすればケイ
タに勝てる相手はなかないぞ」

「それでいいさ」

こんなもんだろう。

才能というものがなく、努力の果てに辿りつける限界値を見定める。シグナムクラスの近接戦闘技能を持つ相手に30分位持つかどうかだ。

「今日は終いだな。ふ、風呂に行くが、い、一緒に……は、入るか？」

「は？」

何を言った？

風呂と一緒に入るだと？

何の策略だ？

時間的に訓練場近くの風呂場は空いているだろう。

何せ早朝だ。

そうは言って誰もいないとは限らない。

「うん、そうだな。そうだ。一緒に風呂に入る。訓練の疲れを取るにも必要だな」

自分に言い聞かせる様にシグナムは言った。

聞き違いでもなく、現実聞いた。

そして、

「いやいやいや！俺にはなのはっている彼女がいますから！」

「知っているが？」

当たり前のように答えられた。

あれ？間違ってるのは俺の方なのか？

それほどハッキリした言葉だ。

「細かい事言うな、な？ な？」

ミウラ・ケイタはシグナムに捕まってしまった。

逃れる事は出来無い。

連行される。

風呂場。シャワーのみの簡単な設備ではなく、ちゃんとした浴場になっっている方に連れ込んだ。

それも女湯の方に。

ミウラ・ケイタを先に押し込み、シグナムは女湯の前に清掃中の看板を立てる。

「ふ、完璧だ」

多少強引だったかな？

いや、主のはやては言った。どんな手段を使っても良いと。

ケイタには逃げられないようにバインドをかけてある。

踵を返し脱衣所に向かう。

「バインドまでかけて、本気かよ」

「ああ、なあに、スキンシップだ。エリオだって訓練のあとは皆と一緒に風呂に入ってるぞ」「」

「アイツは子供だろーが！」

知らんな。

脱ぐ。豪快に。

脱がす。豪快に。

うわ、これがアレか！

会議のあとの勉強会で見た映像の物より大きいぞ？

「拙者、下心なぞ持ちあわせておらんで御座る」

「おい。侍になってんぞ」

浴場にて、身体を清めたのだ。隣同士に大きめの風呂に入っていた。シグナムは終始いつも通りを装っており、それを見てミウラ・ケイタは勘違いした。

ミウラ・ケイタはシグナムがただ己をエリオと同じような扱いをしないでただと思ったのだ。

思えばシグナムの見た目は若いが実際の年齢は遙か年上であることに気付いたのだ。

しかし、それはシグナムの策略であった。

「さてつと」

「出るか」

私の覚悟は決まった。

手を動かす。

握るのは男性の弱点だ。

「ち、ちよ、何してんの？」

だが、お湯の中確かに熱くなるモノがあった。

つまり私に反応しているのだ。

直立させる。

もちろん、そっちの方ではなく身体の方を。

勉強会の映像ではコレを口でしたり、胸で挟むのであったな。ならば、学んだ事を実行する。

抵抗があるが、両手を相手のお尻に添えて持ち上げるように支える。座り込む事もできず、ただ私の頭を押さえる様に相手は手を添えた。が、その程度の力で止まることもなく、頭を上下に動かす。

舌も、そして吸引する。

窄んだ口内に出された。

確か飲むのであったな。

苦い。だが、癖になりそうな味だ。

相手を持ち上げてタイル貼りの風呂場に寝かせて襲う。痛みが走るが我慢出来る範疇だ。

「ふふ、入ったな？ ん？」

「や、やめろ。俺には彼女が……」

口を口で塞ぐ。

事後、その日のシグナムを見た男性局員はいつもに増して美しいと感じた。

一方、疲れた顔とうつろな眼で歩くミウラ・ケイタを見た局員は仕事熱心にも程がある。彼に休みを、と考え仕事の効率が上がったという。

裏切りと謀略。

策略と搾取

配点：（剣士）

どこまでがセーフなのだろうか？

やばくなったらノクターンへ行為の部分だけ移動させよう。

あと今更ですが細かな設定とかは気にしないで下さい。

原作を見なおしたりWIKI見たりしてますが、間違っけていても気にしないでね。

第四章 烈火の将は実力派（後書き）

今日から休みに入る人も多いでしょう、ということでも更新。

第五章 どうかしている人達（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第五章 どうかしている人達

どうしよう？

どうしてこうなった？

恋人がいるのに他の女の子と関係を持ってしまった。
浮気したら殺されるかな。

いや、アレは浮気ではない。

無理矢理と言う名の何かだ。

反応してしまったのは仕方がない。だって男の子だもん。
無かった事にしよう。

いや、八神はやてがいる。

アイツがヴォルケンリッターの行動を把握していないわけがない。
顔、合わせづらいな。

シグナムは思う。

先んじて奪ったはいいがどうしたものと。

まず、主であるはやてに知らせるべきか？

それとも、なのはに知らせるべきか？

どちらにしても、何らかの反応はあるだろう。

主は寝るだろうか。それとも悔しがらるだろうか。

いや、どうやってそれを成したのかを問うだろう。

さらに、行為の詳細まで聞く。

その上で、ミウラ・ケイタを私から取り上げるだろうな。

ならば、黙っているか。

思いたすのは、朝の快樂である。

始めてであったが、よほど相性が良かったのだろう。痛みはあったがそれ以上に快楽と満足感があった。アレを主に渡してしまったら、きつと墮落する。騎士であるからこそ、主を守る役目として盾となろう。アレの味を知ってしまったら主は駄目になってしまう。

「是非も無し」

私が墮落を受け止めようではないか。

高町なのはとフェイト・テストロッサ・ハラオウンは普段通りであった。

結局、高町なのははフェイト・テストロッサ・ハラオウンの望みである、ミウラ・ケイタを今度の休日に貸すと約束したのだ。

そうしなければ相手が正常にならないと判断したためである。

また、過去の約束を破ってしまったという罪悪感からも仕方なしに承諾したのだ。

だが、高町なのはは傑物である。

貸すとは言ったけど、私が付いて行かないとは言っていない。

それに、ケイタは私の彼氏だ。なら、彼女である私が付いて行っても問題はないはずなの。

恐ろしいほど静かな日であった。

管理局には珍しく、比較的事件も少なく、警報もならないのだ。

警察と同じような組織としてそれは喜ばしい事である。

だが、その静寂も昼過ぎに緊急事態を知らせる警告が鳴り響いた為

管理局は揺れた。

そう、時空管理局本局が揺れたのだ。
それは、

「、全管理局員に警告！ 高町なのは教導官及び、ミウラ・ケイタ教導官が意見の対立の為、戦争してます！マジヤバイです！アレが、エースオブエースと『不敗の魔法タンク』の戦い！皆！見ないと損だよ！え？止める？無理無理！だって無敵のエースと不敗のミウラ・ケイタですよ！」

局内放送に管理局員は揺れた。

「これは、仕事どころじゃねー。今すぐ見物だ！滅多に見られるのんじゃないぞ！新人、俺が許す！仕事を一時中断して見に行くとぞ」

「さすが、上司！ついて行きます！」

「我が隊も私に続け！戦術の神とまで謳われるミウラ・ケイタの生戦闘が見れるぞ！」

「エースオブエース、高町なのはか、不敗の魔法タンク、ミウラ・ケイタかどちらが勝つか……。さあ、賭博だ！お前らどっちに賭ける？」

「あわわ！ヤバイですよ。非殺傷設定でもマジ殺し合いに見えるんですけどー！」

「大丈夫だ。問題ない」

各自、思いはそれぞれだが、レベルの高い訓練だと自分自身に納得させる理由を思い描いていた。

シグナムに襲われちった。テヘツ。
ってやれば許されると思ったんだが、マジ怒りでマジモードでマジ砲撃を撃ってくるとはね。
管理局本局の局員達は見物に徹するみたいだ。建物に被害が出ないようにバリア貼って、用意周到な事だ。止めるのを諦めてこちらが力尽きるのを待つスタンスだ。
さて、俺の彼女で怒りモードの高町なのは空戦S+だ。一方俺は空戦B。教官試験ギリギリのBだが、それは実技試験のランクで筆記試験は満点だ。

「こうやって、本気で戦うのっていつ以来？」

「んー？ 確かなのはが開催した小学校卒業記念決闘トーナメント以来だね」

確か合っているはず。

「懐かしいね。あの時より私、強くなってるよ？」

「そりゃ余りある天賦の才能に努力を重ねて弱くなる奴の方がおかしいって」

俺だってそこそこに強くなっている。

悠長に話し合っているが、砲撃の威力は本物だった。

ダイバインシューターで包囲されて外から見れば窮地に見えるだろうな。

「観念した？ 今ならシグナムさんとは事故ってことで我慢してあげるけど？」

「事故っていうか、相手は狙ってやった節があるから今後もないとは言えないな」

許すも何も、シグナムに襲われたって言った瞬間に砲撃だもんな。今になってやっと少しは冷静になってきたようだ。

「それに、俺は」

秘匿回線の念話で続ける。

『なのは一筋だって言ったんだけど、相手が聞かなかった』

『それでも、逃げるとか、何なら武力行使で倒すとかできたでしょう？ 不敗の二つ名ついてるケイタならできたでしょ？ だったら、それは、私以外に下半身が反応したってことなの！』

「じゃあないだろ。男だし。」

「平行線だな」

「平行線なの」

許す、許さないの平行線。
だから、負けたほうが悪い。

「意見が分かれた時は」

「決闘なの！」

見物していた管理局員は感嘆をあげる。

「あの状況下から脱出できる術があるとは……」

「砲撃をギリギリで避けて砲撃線を飛んで反撃？」

「それをいなして、さらに反撃。クロスカウンターをさらにカウ

ターで返す高等技術だぞ……！」

「高等技術のオンパレード。新人はこれを見て学べ！ 盗め！」

「魔法弾をチェインバインドで弾いた？！ あんななどの教科書にも乗ってないぞ?!」

「いや、可能だ。魔法である以上、通じる。が、あんな使い方があるとは……。不敗の名はあの柔軟な発想と魔法技術の多さで成り立っているというのか?!」

その後、3時間に及ぶ戦闘は両者引き分けで終わる。

エースオブエースはその実力を名実共に再度知らしめ、不敗のミウラ・ケイタはやはり、不敗であった。

ぶつかり合う恋人達。

天才と秀才。

果たしてどちらが優秀なのか。

配点：（痴話喧嘩）

聖戦に参加の皆様方、作者です。

暇つぶしにどうぞ、あと、なのは完売！

身体に気をつけて戦いに挑んで下さい。

私は実家でのんびりしてます。

第六章 金髪娘の暴走（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第六章 金髪娘の暴走

喧嘩の後は仲直りだ。

互いの意見の平行線は折り重なる境界線上に落ち着く。

つまり、今後は全力で高町なのはを愛すること。そして、襲われないように全力で逃げることに。

それが互いの意見を合わせたものであり、決闘が引き分けた以上、互いの意見を尊重しあったものである。

フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは正確にミウラ・ケイタの消費魔力量を見抜いていた。

決闘と言う名の訓練で処理された二人の戦いは引き分けに終わった。高町なのはの消費魔力量は全体の7割近く消費されている。一方、ミウラ・ケイタの消費魔力量は全体の4割程度だ。つまり、余裕を持って引き分けたのだ。

だが、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは知っている。ミウラ・ケイタは戦いには精神力と集中力が必要だ。魔力を使い切る前に、精神消耗と集中力の消耗で戦えなくなるのだ。磨耗した状態では魔力使用は難しい。

「つまり、今がチャンスだね？ バルディッシュ！」

『ミウラ・ケイタは今、碌な魔法は使えないはずだが、マスター。俺が見るに、弱った得物だ。今なら美味しく頂ける好機だと見るぜ』

「うん！ 行こうバルディッシュ！」

『了解した。ミウラ・ケイタは今自室に居ることを感知している。』

高町なのはは疲れて医務室で睡眠中だ』

さすが、バルディッシュ。聞かなくても知りたいことを教えてくれる。

寝ている男を起こさない様に静かに部屋に侵入する。

ドアのロックはバルディッシュが破ってくれた。
侵入した後、ドアに再びロックをかける。

「スウー、ハアー」

ミウラ・ケイタの部屋の匂いだ。

彼はベッドの中で眠っている。
服を脱いだほうがいいかな？

「どうすればいいと思う？」

『犯すべきだぜ。まずは起きない内に拘束してしまうのがいいと思うぜ。その後は、好きに犯せばいい』

うん、なら。

「バルディッシュ！」

『イエス、マスター』

起こさない様にバインドをかける。

そして、歩みをベッドに向けて、

「はあはあ、もう、我慢できそうにないよお」

下着だけ脱いで、相手の足元から布団の中に侵入した。

布団の中、確かな温もりと熱く硬い物を握る。

そのまま、滑りこむように相手の顔を見る。

握った物を既に蜜に溢れて準備が整った所へ挿入した。

それでも相手は起きなかった。

痛みがあまりない。

話に聞いている限りでは初めては痛いはずである。

だが、それは自分の秘所の溢れ具合から自分で納得した。

必要以上な性的興奮で楽しかったのだ。

彼女は思う、自身は淫乱なのかと。

それでも、性感と達成感からうまく思考ができず、腰を動かすだけのメスとなっていた。

ミウラ・ケイタは朝早く目覚めた。

そして、心地の良い重みと柔らかさに気付く。

「え？」

金の髪。流れる金髪に見覚えのあり過ぎる顔。

フェイト・テストロツサ・ハラオウンだ。

何故か彼女はシャツ一枚で、布団の下。

それを確認して絶望した。

穿いていない。俺も、フェイトも。

そして、明らかに血の跡があり、さらに気怠い。

導かれた答えは、

「やられた!」

寝ている間に襲われたのだ。

起きない自分にも問題があるのだが、まさかドアのロックを破ってまで侵入されるとは思っていなかった。

生々しくも使用済みティッシュが4枚転がっており、その数が何を示すのか、恐ろしくて考えたくなかった。

完全に覚醒した頭で考える。

取り敢えず、シャワー浴びよう。

「げ……」

自室にあるシャワールームには鏡がある。

それを見て、

「フェイトってキス魔なんだ……」

キスをされた印が幾つも唇の周りに付けられていた。

「どうして起きないかな俺」

シャワー後に着替え、自分の服とフェイトの服を洗濯機に放り込み、証拠を隠滅する。

さらに、部屋を清掃して、匂いを消すために消臭剤を巻いた。

それでもフェイトが眠ったままであった。

夕べはお楽しみでしたね……。

「俺は何をやってたんだか……」

『そいつは交尾だろ。マスターは随分と筆り取って満足してたぜ』
俺の独り言に答えたのはバルディッシュであった。

『ミウラ・ケイタが起きなかつたのではなく、起きれなかつたんだぜ！ 俺ってマスター思いのデバイスだろ？』

それはつまり、

「テメエ！ さては、催眠系の魔術を？！」

『おう！ 何、マスターがミウラ・ケイタを襲い易いようにインストールしておいた。お陰で大成功！』

よし、コイツ初期化してやる。

「んっ……。あれ？ どこどこ？ あ、あー！」

フェイト起床！

「私、やっちゃった……。本当はばれない内に帰るつもりだったのに！ バルディッシュ！」

『イエス、マスター』

セツトアップだと？！

フェイトは持ち前の高速移動でドアを開き、振り向きざまに、

「え、えと、私！ 後悔してないから！ あと、気持よかったです
！」

言い放って逃げた。

服、どうやって返そうかな。

後日、服はいつの間にか回収されていた。

ミウラ・ケイタはドアのロックを嚴重な仕様に変更する、と決心した日である。

その日以来、ミウラ・ケイタの部屋のロックは堅牢なシステムを組んだ生体認証システム、声紋認証システム、指紋照合システムを導入し、さらに、IDカードを提示し、パスワードを入力しなければ開かない重厚な守りになった。

局員の間ではその嚴重さから何か重要機密を扱う仕事をプライベート空間まで使つてする勤労者として称え、各員ががんばろうと思わせた。

金髪娘の暴走

機械の暴走

配点：（フェイト）

第七章 タヌキ娘の知略（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

第七章 タヌキ娘の知略

「ぐおおおお」

「ひっ」

それは叫びであった。

それは嘆きであった。

それは猛りであった。

血の涙を流す人物は咆哮する。

「おおおお！ なんでや！ 既になのはちゃんには先を越され！

フェイトちゃんまでに遅れを取った！ 私は悔しい！」

「は、はやてちゃん……」

「……」

「はやて……」

「落ち着くですー」

八神はやての豹変に、シャマル、シグナム、ヴィータ、リインはそれぞれの反応を見せた。

シャマルは取り乱す八神はやてに動揺し、シグナムは黙り、ヴィー

タは同情し、リインは宿^{なだ}めた。

その中でシグナムは恐れていた。

まずい、まずいで御座る！

ここに来て、ミウラ・ケイタとの関係を黙っていたことを後悔した。今更言えるわけがない。

リインは知っているはずなのに今まで主であるはやてに伝えていないらしい。

それは、リインが思った以上に腹黒だからだろうか？
それとも別の理由があるのだろうか？
分からないまま、はやての絶叫を聞いていた。

リインは熟考する。

シグナムの功績を使う札と考えてどうやれば自分にチャンスが回ってくるかを複数思考で考えた。

人間化すればおおよそヴィータと同じ位の容姿になる。

しかし、ミウラ・ケイタがその容姿に反応するかしないかが問題であり、ヴィータが結ばれなければ自身もまた、結ばれないと考えたのだ。

よって、リインはヴィータが結ばれるまではシグナムの功績を黙っておく事にしたのだ。

また、先んじてシグナムとの関係を八神はやてにバラされたくなければ私を抱けと脅迫しても良いのだ。

シグナム以外で次にチャンスがあるのは自分自身だと確固たるモノがあり、八神はやての動揺の様も滑稽に見えてしまうのは余裕があるからだろうかと言える。

実の所、フェイト・テストロッサ・ハラオウンの行動も伝えなくても良かったのだが、彼女が彼の部屋に入るのを一般局員が目撃しており、その局員は仕事の打ち合わせか今後の仕事の話だろうと思っていたようだが、リインはこの局員からいずれ漏れる事を懸念して早めに手を打ったのだ。

それが、フェイト・テストロッサ・ハラオウンとミウラ・ケイタの関係を八神はやてに明かすことであった。

八神はやての階級は二等陸佐である。

よって、その権限からアクセスすれば二人のスケジュールが改変できるのである。

昨日の二人は部屋で今後の機動六課について朝まで仕事という事になっっている。

そのスケジュールは一般局員でもその気があれば確かめられるため隠蔽工作は完璧である。

あまり、無理のない変更でよかったですー。

八神はやては一通り感情をさらけ出したことによって落ち着きを取り戻していた。

そして、天啓が降りる。

本日の仕事、機動六課の部隊長庁舎視察。

それは、”誰を視察に同伴させても違和感なく仕事”と言い切れるのだ。

「ふ、ふふ、ふはははは。アーツハツハハ！」

「ついに壊れたか主よ」

「ポケエ！ シグナムのポケエ！ リイン！ 急遽ミウラっちの仕事を変更や！ 機動六課の部隊長庁舎視察に連れて行く！ 建前は、もし、庁舎を敵に攻め入られた時の為にどうすればいいかの見地を戦略講師の意見を聞く、や」

「り、了解ですー」

何もなかった。

そう振る舞うのはフェイト・テストロツサ・ハラオウンとミウラ・ケイタであった。

午前は仕事で一緒に執務官補佐であった。

午後の仕事は急遽変更で八神はやての視察に同伴。

本当なら戦術教導官の講師を新人にするはずであったが、それは他の誰かに振り分けられたようだ。

まあ、引継ぎと資料は渡してあるから問題ないだろう。

思惑通り、現場に出ることがなくなりよかった。

かと言って実戦の勘を落としては身も蓋もないので、その内誰かと実戦訓練が必要だ。

ならば、横にいる人物に声をかけよう。

「なあ、フェイト、今度実戦訓練やろうぜ」

「え？ もう！ 昼間からエツチな事言わないでよ！」

夜の実戦訓練ではない。

アホの子だ。

「いや、現場に出ることなくなったからと言って腕を落としたら駄目だろ？」

「あ、そっちなあ。ごめん勘違いしちゃった」

顔を赤らめて謝られたので許そう。

美人の恥ずかしがる顔はそれだけでご馳走なのだ。

まあ、なのはには負けるがな。

昼食を取る。

久々になのはと二人きりでご飯だ。

「こうやって二人で食べるのって久しぶりだね」

「そうだね。何かとはやてかフェイトがいるからね」

そう、狙ったように彼女達は二人きりでの食事を邪魔してくるのだ。それが珍しくなかった。

四人がけのテーブルに正面同士で向かい合う。

このテーブルに乱入する勇気のある人物は彼女達以外にはいなかった。

平和である。

だが、ミウラ・ケイタはフェイト・テストロッサ・ハラオウンの事をどうやって言い訳するのか思考していた。

まあ、また、決闘になりそうだなと予感していた。

短期的に二人の女性と関係を持ってしまった。

それに激昂されるだろう。だからほとぼりが冷めるまでは黙っておこうと考えた。

目の前の彼女には笑顔が似合うのだ。

「ね、次いつしよっか？」

「ぶっ！」

エロい彼女だ。

「今晚は？」

「いいよ」

二つ返事であった。こうして二人は午後の仕事に活力を得た。

騙し、騙され策に嵌められるのは誰か。

配点：（主人公）

第七章 夕又丰娘の知略（後書き）

誤字修正

第八章 歩くバカと怒る彼女（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第八章 歩くバカと怒る彼女

「これ、どう思いますか？」

「凄く、綺麗ですね」

八神はやては仕事の時は標準語である。

それに答えるミウラ・ケイタもまた、仕事の際は敬語である。いくら同期で同年齢でも上官である。

「八神二佐。戦略的にココを制圧することは難しいでしょう。あるとすれば主力部隊が出払った状態を突かれる場合です。その際に各主力戦力が交戦状態であるのなら被害は大きいでしょう。その場合、庁舎内の非戦闘員の脱出経路、脱出方法を確立しておけば被害は建物だけで済みます」

「なるほど、主力戦力の分断とそれに乗じた侵略行為ですか。確かに非戦闘員の脱出訓練は必要ですね」

八神はやては元々頭の良い人物である。よって、話が通じやすい相手だ。

意思疎通が通りやすく、また話す内容も質の高いものであるのだ。ミウラ・ケイタは仕事時の八神はやてに好感を持っているのだ。

「さらに言えば、緊急事態が起きた際に自動に防御陣が発生させられるシステムを構築すれば建物はしばらく非戦闘員の盾となってくれるでしょう。その間に脱出、ないし、後発隊の到着ができれば理想的ですが、予算が降りないでしょう」

「ふふ、まあ、それは仕方ないことです。非戦闘員の脱出訓練、ま

た、重要書類などの運び出しも含めた効率の良い脱出経路を考えましょう」

そう言えば、重要書類を忘れていたな。

人命優先に考え過ぎた。重要書類はこの庁舎が破壊された場合、その後の再建に必要なものになってくるのだ。

「では庁舎内の脱出経路を歩きながら考えましょう」

「ええ、もう一度、今度は非戦闘員が脱出する事を前提とした視点で庁舎内を周りましょう」

1時間後、あらゆる想定で脱出経路を考えた。

それを図に書き込んだものができて、仕事は終わりだろうと思った。

「ココは私の部屋になります」

「そうですね」

ソファーに座り込むはやて。

それは仕事終了と言った感じであった。

「ミウラっちも座り？」

「ん。はやても仕事お疲れ」

呼び名で完全に仕事終了だと理解した。

「設備自体はもう生きてるからお茶いれてーな」

「そういうのは座る前にいってくれ」

座った瞬間にまた、立ち上がる事になった。

冷蔵庫にはコーヒーとお茶があった。

「なあ、コーヒーとお茶があるけどどっちがいい？」
「お茶で」

なら、俺はコーヒーだな。

「はいよ」

「あんがとー」

ソファアール字のものであり奥にはやてが座り手前に俺が座った。左奥のはやては股を開いており、ガラステーブルの下でそれが見えていた。

それに視線が言ってしまうのは男の正しい脊髄反射だ。

薄水色か。

何故か今日は黒タイツを穿いていないな。

気温も暖かくなってきたし必要ないのだろう。

「すけべ」

「何のことやら……」

10年近い付き合いでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

はやてはソファアールを猫が歩く様に四足歩行で寄り添ってきた。

そしてそのまま、猫が主の膝上に丸まるように顔を乗せてきた。

「どうした？」

甘えたいのだろうか？

この位のスキンシップは何回があった記憶がある。

「四の五の言わずに私の処女奪えや！」

あつという間にズボンが開かれた。
抵抗する、が。

「力が入らない？」

「シャマル特製の毒を盛った」

飲み物に即効性の弛緩薬か、しびれ薬が盛られていたのだ。

「先に解毒剤を飲んでいる私に落ち度はないで？」

ソファーに座ったまま、跨る形で散る。

痛みは薄く、思った以上に性感が強かった。

やめると抵抗する男にさらに興奮する。

だからこそ、犯し抜く。

唇を貪り、男の象徴を貪り、中で貪り尽くした。

夜。

高町なのはとデートして、ホテルに外泊した。

ミウラ・ケイタの特筆すべき点は保有する魔力量と歴戦の戦闘経験からなる戦術、戦略眼である。

また、さらに追加すべき項目が増えた。

それは、精力の回復量と貯蓄量が一般的な成人男性よりも数倍あるのだ。

それを自覚する日であったとミウラ・ケイタは自分自身で自笑して自覚した。

腕の中にいる高町なのはを愛しているのにも関わらず、この数日間数人の女性と関係を持つてしまったことに罪悪感と後悔があった。しかし、それも仕方の無かった事と割りきって前に進むポジティブ思考の持ち主でもあったのだ。

高町なのはは許せる女であった。

恋人と同じくらい好きな親友がいる。

本当は親友達が自分の恋人に好意を持っていることに気づいていた。それでも、恋仲になった以上、独占するのは己だと自負しており、どれだけ浮気されても最終的に自分の元に戻ってくるのであれば一度位なら許そうと思っていたのだ。

しかし、三人も。

それも親友達に襲われると言う形で身体を許した恋人に激昂するのは仕方の無いことである。

だから、全力全開で戦いあった。

管理局の訓練場崩壊という結果を残した戦闘は後にエースオブエースを怒らせてはいけないという教訓になった。

それを相手に敗北をしなかった人物もまた、要注意人物とされた。

伝説の三提督直筆指令。

・高町なのは及びミウラ・ケイタはやりすぎたのでちょっと頭冷やす為に二人仲良く3日程休暇ね。

猛る女。

嵌める女。

配点：（怒り）

第八章 歩くバカと怒る彼女（後書き）

誤字修正

第九章 俺のなのはがこんなに……（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第九章 俺のなのはがこんなに……

休暇一日目の朝。

高町なのはとミウラ・ケイタは二人で市街のホテルに泊まっていた。日が昇ると同時に二人は繋がったまま行為を止めること無く互いに求め合っていたのだ。

戦果として合計で6回の攻防が繰り広げられ、丸一日を使って戦闘は行われたのだ。

休暇二日目の昼。

互いに食事の休憩を挟みながら繋がっており、三大欲求の2つを満たしていた。

不敗の二つ名を持つ男は初めて負けを認める事となる。

だが、戦果に傷はつかない。何故なら、非公式の戦闘行為であるから。

休暇三日目の夜。

エースオブエースは男に不覚を取り敗北を得る。

互いに弱点を知り尽くしたのだ。

エースオブエースの弱点は首筋から背中、臀部周辺と太ももの根元から上である。

あらゆる攻防を繰り広げた結果、不敗の男は後ろを取り攻める事がエースオブエースに取っての最大の弱点と知ることになるのだ。

一方、男の弱点は胸にある突起であり、本来は排泄する為の機能を持つ箇所を攻められる事が何よりの恥辱であり、同時に弱点であったのだ。

互いに休暇を終え本来の仕事に戻った際、女はより美しく、女の色気を醸し出していた。

男のほうは栄養を搾り取られた植物のような枯れ具合であったが、どこか満足気であった。

「うーん。久しぶりの仕事に感じるの」

高町なのははたった3日の休暇であったが、充実したものであったと確信を得る。

「さて、新人さんの準備なの！」

それは機動六課に必要な人材を集める為の重要な下準備であるのだ。戦闘系技能の将来的な伸びしろを持つ原石。

それを見極めて人材を集める。

八神はやての夢である自分の部隊を持ちたいという夢を叶えるため、充実した気力で仕事を再開した。

仕事の効率を取るか身の安全を取るか。

天秤に乗せられた案件は考えるまでもなく身の安全を取る方に傾いていた。

しかし、退路を完全に確保した状態であるのなら話は別である。

つまり、ミウラ・ケイタはシャマルが支配する空間の医務室に足を運んでいた。

「つまり、栄養ドリンクで効果が高いものが欲しいってことね」

「ああ……」

俺は医務室の扉の向こうにいるシヤマルに話しかけていた。退路上に立ち位置を配置しているので、逃走ルートは完璧だ。

「それにしてもケイタ君。医務室に入ったら？ そんな場所で立ち話もなんだし、治療を求める相手の診断もせずに取り敢えず栄養ドリンクをと言われても私、困っちゃうわ」

その微笑みには癒しの力が込められているように感じた。

「俺は困らないし、急ぎの用件があるから、適当に栄養ドリンクをくれると助かる。時間がかかるのなら俺は立ち去る」

最大の警戒心を払う。さすがにコレ以上彼女であるのは以外の女性と関係を持つ事はしたくない。

外見年齢は22歳相当で姉属性を持つ相手は俺に取って難敵である。完全に防御を主軸とした戦い方をされると攻略しにくいタイプであり、作戦指揮や参謀までこなせるので厄介である。

そして、唯一俺達の中で外見年齢が高く、皆の姉的存在を担当しており、全員に説教のできる人物でもある。

俺自身、過去何度も説教されながら治療を受けるという体験をしている。

「まあまあ、なら早めに済ませましょうねえ」

シヤマルは微笑んだままで、不気味な雰囲気醸し出していた。撤退！

「ここは通さん……」

「ザフィーラ、テメエ！」

盾の守護獣だ。

シヤマルが姉ならば、こいつは兄的な役割だ。

最近は犬モードが多い。そしてその犬は忠犬であった。

盾である魔術を広げて医務室に押し込む形で俺を追い込んだ。

同時に、扉が自動的に閉まった。

「私の役割は守りと癒し。けど、時には計略を働かせることだってあるのよ？」

医務室というには程遠い魔法の仕掛けが施された部屋の中。

男は薬を盛られていた。

それは医務室の管理人である女性が独自に開発した栄養ドリンクE Xであり、その効能は元気になる事である。

それは男の望むものであったが、せつかく充填した物を吐き出していた。

女は姉である役割として寝かした男に跨り上下に腰を動かしていた。その上で自身の身体を見せつけるように背を仰け反っていた。

結局、疲れは余計に溜まり、虚ろな眼で死んだように働く彼を誰も
が畏怖した。

「仕事の鬼……！」

翌週に控えた機動六課新人の試験の為、高町なのはとミウラ・ケイタは打ち合わせを行っていた。

「スバル・ナカジマとティアナ・ランスターか……。どうも二人には縁があるらしい」

ミウラ・ケイタの言葉に高町なのはは頷く。

「スバル・ナカジマって、確か私達が昔助けた娘だよね？」

ミッド臨海空港の大規模火災事故の際に姉と共に助けた娘だ。

「姉が居たはずだ。確か俺が助けた方だな。まあ、良い所は全部フイトが持つていったが……。それにしても、シューティングアーツの使い手か。それにティアナ・ランスターと言えば、ティーダの妹か」

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターには縁がある。その二人に俺も縁があるようだ。

ティアナ・ランスターの兄であるティーダ・ランスターとは昔に仕事で一緒だった事がある。

優秀な射撃型魔導師で、あの時の次元犯罪者を確保するときにも年下である俺の意見を素直に聞いてくれた好青年という印象がある。ならばその妹にも期待が持てる。

「兄と同じく射撃型魔導師か。スバル・ナカジマは近接戦闘系。良いコンビになりそうだな」

夢と目標。

準備と未来。

配点：(新人)

第九章 俺のなのはがこんなに……（後書き）

誤字修正

第十章 新人と機動六課（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

第十章 新人と機動六課

「まずまずだな。二人共良い感じのコンビというのに間違いはないけど」

「まだ、実力と実戦が足りない、でしょ？ ミウラ教導官」

新人二人の様子を俺となのはで見守っていた。仕事である以上、呼び方が固くなる。

「高町教導官。彼女達、たぶんゴール付近でやらかすと思うのでサポートを頼みます」

「ん、了解」

誰も見ていないからと言って不意打ちでキスとは。

スバル・ナカジマは憧れの人物を前に試験の是非など忘れて高揚していた。

「あ、あの私、高町教導官に憧れて……。それに、ミウラ教導官も尊敬していて……。とにかく、私、人生の最大の幸福にいると思います！」

憧れの二人。尊敬の二人。

「ちょっと、スバル！ いい加減にしなさいよ！ 私だってミウラ

教導官のサイン欲しいんだからね！」

スバル・ナカジマは体術の心得を持っており、ティアナ・ランスタ
ーは射撃の心得を持っていた。

私は嬉しかった。

体術の心得の作者であるミウラ・ケイタに会えた。
だから、ちよつと周りが見えなくなっていた事に反省した。

「ごめん。ティア。私、ちよつと周り見えなくなってたよ」

「わかればいいのよ……」

ティアの眼。

マジマジと上官であるミウラ・ケイタを見る目は、期待出来る。
今度の同人誌のクオリティが楽しみだ。

「書籍のファンはありがたいが、仕事中だ」

怒られた？

「スバル・ナカジマ二等陸士。近接戦闘は目を見張るものがある。
先ほどの高町教導官の真似事か？」

アレは、なんというか……。
憧れの人の技名を拝借したものだ。

「ティアナ・ランスタール二等陸士。射撃と幻術、状況判断もなか
かだ。兄と比べるのはあれだが、潜在的な能力と成長性を見ると、
いずれ兄を超えるだろう」

ティア。う、羨ましいな。
もっと私を褒めて欲しい。
私はほめられて伸びるタイプだ。

「スバル・ナカジマ二等陸士は体力と魔力が恵まれているみたいだから、鍛えればいずれ近接戦闘に欠かせない主戦力になるだろう。まあ、試験自体はダメダメだが」

褒められたが、試験の合否が告げられた。

試験終了後直接合否を告げられるのは初めてだ。

「不合格……。スバル！ アンタが悪い！」

「そんなあゝ。試験中は私を置いて合格しろって言った癖にいゝ」

落胆する私達にミウラ教導官はさらに告げる。

「と、まあ口頭で不合格通知を出した所で、これは正式な合否発表ではないので心配しないで欲しい」

「ティアナ・ランスター二等陸士はまず、左足の治療だな」

そう言ってミウラ教導官が私に近づいてきて、挫いた左足のブーツを、脱がそうと屈んだ所で、

「ち、ちょっと待ってください。ブーツは自分で脱げますから！」

苦言を言うのであれば、今の私のブーツを脱がそうとしないで下さいと言いたい。

汗臭いかもしれないし、足が臭うかももしれない。それを上官である人物に言えるはずもなく、されるがまま治療をされる。

「捻挫だな。この足じゃあ碌に動けないから遠隔の幻術に切り替えて味方のサポートに徹するか」

簡単に見抜かれていた。

ああ。やっぱりこの人、良いなあ。

本局で不敗の名将。

エースオブエースと肩を並べる人物。

非公式だけど、若手女性局員の付き合っみたい男性アンケート1位。

さらに、将来玉の輿ランキング上位。

ついでに、私の同人誌で攻め受けどちらを書いても売上上位。

人気があるのは兄のティード・ランスターとの絡みだ。

それはどうでもいいわ！ このアングルの顔を脳に叩きこまなければ！

やばいわね。ちょっと濡れてないかしら……。

「自分の身を守る事も優先すべき事だ。残量魔力も少ない。その辺りは今後、機動六課に入れば解決していける」

それは、つまり、

「再試験があるって事ですか？」

左足の治療を終えたミウラ教導官が笑顔で頷く。

「そうゆうこと。頭の回転もよろしい。今後の活躍に期待するよ」

「サービスにも気をお配りですか？ ミウラ教導官」

「八神二佐。それはどういう意味でしょうか？」

自覚ナシかい！

先程のやり取りだ。

褒めて貶して、持ち上げて褒める。

トドメに笑顔や！

多感な時期の女の子相手によつやるわ。

「いえ、見事な勧誘でしたので……」

「サインのことでしょうか？ 試験は終了していたので私としてはセーフだと思いましたが」

話が交差していない気がする。

「その辺りは私としては兎や角言つつもりはありません」

頭の上に疑問マークが浮いていそうな顔だ。

女の子にフラグを立てた事に自覚は無いらしい。

これは新人に対して注意が必要な案件だと確信する。

職場恋愛ナシにしてやるるか……。

「なあ、ケイタ。実際あの二人どうなん？」

「放置しておくには惜しい。入隊するかは彼女達の判断に任すが出来れば機動六課に入れておきたい人材だな」

まあ、あの二人の様子だと確実に入隊するだろう。

確かに能力の伸びしろを鑑みるとミウラっちの言つとおりだ。
ついでに、勇気を持って呼び捨てにした事に関しては何も反応はないのはなんでやる？

「はやて、別に呼び捨てで構わないし、今更って感じだがこれからもよろしく頼むわ」

何を頼むかはわかりきった事だ。
こういったコチラの欲しい解答を自然としてくれる辺りがミウラっちの良い所であり、悪い所だ。

二人の新人。

特急フラグメーカーの主人公。

配点：（フラグ）

第十一章 バカ新人と素直な新人（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。
割りマジで原作崩壊しています。

第十一章 バカ新人と素直な新人

機動六課規定。

・ミウラ・ケイタは機動六課女性局員の夜の相手を断らない事。

ポスターの様に貼られた規定事項に謎の一文が書かれていた。それを剥がして破いて捨てたのはミウラ・ケイタであった。

「さて、仕事、仕事」

庁舎内の全ての規定事項を剥がして処分した。
そして、機動六課の長へ文句を述べに足を向けた。

「冗談やがな。冗談。まあ、本人が承認するなら再度ばら撒くけども？」

「いや、なのはと付き合ってるし。はやて、お前バカ？」

「正常や」

仕事では真面目なのだが、自分の夢である部隊を持てた事で舞い上がったのだろう。

「舞い上がるのもほどほどに。余計な仕事を増やされたせいではやての総部隊長挨拶までの余暇時間が無くなった。仕方ないからここで待つか」

「そうやね。集合15分前やし。飲み物位だすで？ ああ、前のよ
うな事はないよ。普通の飲みもんやから」

それはそうだろう。

まあ、さすがに仕事寸前でハメようとするわけもなかった。やはり、仕事には真面目なのだ。

挨拶もそこそこに新人たちの訓練に入る。

だが、その前に一悶着あった。

シャリオ・フィンノー。

通称はシャリーで、A級デバイスマスターだ。

メカオタクのメガネっ娘。

「ミウラ・ケイタ教導官。というか、ミウラ。いい加減デバイス持ちやがれです」

「上官の前に年上だぞ……。メカヲタ……。！」

デバイスを持たない俺に敵愾心丸出しである。まあ、出会った当初からこんな感じで俺に突っかかってくる数少ない年下だ。

「うるさいですね。ミウラは全デバイスマスターの敵！ ミウラの魔力供給に耐えられるデバイスを作っつていずれデバイス無しでは戦えない身体にしてみせますよ……。！」

実は良い奴だ。

過去に実験したことがある。

魔力供給をデバイスで管理して供給配分を任せると、何故かデバイスがショートして壊れるのだ。

それに、デバイス無しでも戦える方法を確立していたので、デバイスの必要性も感じていない。

「シャーリーには四人のデバイスという餌で満足してもらおうか」
「ふふ、同時に10まではいけますよ」

俺の理解したくない発言をしたシャーリーを無視した。

エリオ・モンディアルは純粹な憧れであるミウラ・ケイタに疲弊させられていた。

四対一の模擬戦。

剣術では何回も矛を交えたが、魔法有りの模擬戦は初めてであった。

「それぞれのランクで言えばお前達と同じかそれ以下だぞー。ほらまだまだいけるって」

飛び回り僕達に余裕を見せる。

「く、それでも、強過ぎない?!」

ティアナさんの言う通りだと思っ。

分かったことは基本的に相手の行動を起点とした防御と反撃。

こちらの動きを完全に読みきった防御に隙を突いた反撃は脅威だ。

「キャラ、もう降参か？」

「いえ、もう少し頑張ります」

小さな女の子が頑張ると言えば年上のティアナさんとスバルさんは頑張らなければならぬと思っだろっし、僕も女の子が頑張ると言うのであれば気力を出して踏ん張ろっと思っ。

たぶん、そうだった狙いがあるんだろうと思い、改めて尊敬する。

「さーて。今日はこれまで。各自疲れを残さないようにしっかりと休むように。休むのも立派な仕事だ」

その言葉に全員がへたり込む。

その中でもキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルはまだまだ子供だ。

だから、歩けそうにない二人を抱えて運んでやることにした。

「よつと、さあ次は休憩だ……！」

「はい」

子供は素直で良い。

「う、羨ましいなあ」

「バカな事言つてないで写真！ エリオとミウラ教導官の資料を盗撮とわよ！」

ティアナとスバルが何か話していたようだが、離れていたのによくわからなかった。

訓練後には汗を流す為にシャワーを浴びるのが常識である。

エリオ・モンディアルも普通にシャワーを浴びるのだが、今回はとある任務を任されていた。

「ちょっと、エリオ。頼みがあるんだけど聞いてくれる？」

その依頼主はティアナ・ランスターであった。

エリオ・モンディアルとティアナ・ランスターは今回の機動六課で初顔合わせであり、初訓練の前に多少の会話をした仲であった。

これから同僚として働く為、互いに仲良くするのは必要であるとエリオ・モンディアルは幼ながらに理解しており、ティアナ・ランスターの頼みごとを内容も聞かずに承諾してしまったのだ。

「いいですよ。ティアナさん」

その依頼内容は、男子シャワー室の撮影とっくであった。

もちろんティアナ・ランスターはそれが盗撮ではなく、訓練の一環とした行為であると説明をしたのだ。

「良い？ あのミウラ教導官の隙を撮るのよ？ それもバレないよ
うにね？ 人間の最大の隙ってやっぱり裸体になった時じゃない？」

つまりは、秘密訓練の内容はミウラ・ケイタの隙を相手にバレない
様に納める事である。

エリオ・モンディアルはその事に疑問を抱くこと無くその依頼の内
容の難しさを考えていた。

「訓練中は一切の隙がないミウラ教導官の隙を突いた撮影。それも
バレない様に完璧にこなすとなると、相当の隠密行動が必要になり
ますね。つまり、これは隠密行動の訓練ですね？ ティアナさん」

「え？ あ、うん。そうよ。そうそう。そんな感じよ……」

ティアナ・ランスターは自分の嘘がまるつきり通じてさらに過大評
価された事に多少の罪悪感を感じたのだが、それでも撮影されるで

あろう男性の裸体の魅惑には勝てなかったのだ。

新人が得るものは何か。

新人が失うものは何か。

配点：（盗撮疑惑）

第十二章 ツインテールとショートカット（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

第十二章 ツインテールとショートカット

ティアナ・ランスターは同人作家である。

それは、副業として行なっており、きちんと納税もしている。

その同人作品の内容は所謂男同士の掛け合いであり、BLとも呼ばれる。

その彼女の作品には多くのファンがあり、スバル・ナカジマもそのファンの一人である。

エリオ・モンディアルに依頼した物が首尾よく手に入り、今まさにティアナ・ランスターは狂喜乱舞であった。

「思った以上に大きい……。それに綺麗な柔肌。お尻の形も女性に近い。やっぱり私の目に狂いはなかった!！」

それは、ミウラ・ケイタの素肌であり、全裸であり、無修正映像であった。

ティアナ・ランスターは指を自身の一番敏感な所で動かして性感に浸る。

秘蔵になる無修正映像をオカズに一心不乱に指で擦る。

やがて、果てる。

しかし、己の潤滑油を使い、そのまま続行する。

オカズが高品質であることから、普段より早く果てたのだが、その空腹は収まらず二度目の咀嚼に移るのは当然の結果であった。

「ふう……」

一息。ティアナ・ランスターは息を吐いて呼吸を整えた。

「人間というものはどうしてこつも欲深いのだろうか……」

まるで哲学者のような疑問に答える人物はいなかった。

「さー。忙しくなるわよー」

気合を入れてペンを握る。

描くのは自分の妄想。

ぶつけるのは自己表現。

「腕が止まらない！　これが、最高にハイってやつね！」

「ハア?!　ティード・ランスターは喫茶店店長?!!」

「ああ、はやて。残念だったな。まあ、機動六課に誘うにしても執務官エリートならフェイトがいるし、正直入隊を進めても断られていただろう」

ティアナ・ランスターの実の兄であるティード・ランスター。

そのティード・ランスターについてまるで調べていなかった為、急遽経歴を調べるようにとはやてから命令を受けた。

執務官のエリート空士。

しかし、ティアナ・ランスターが管理局を目指して届けをだしたそ

の日の内に突然の辞表。

そして、ある程度の精密射撃魔法を妹に教えた後にミッドチルダ某所に喫茶店を構える。

ティアナ・ランスターに自分の持つ技術を叩きこまなかったのは、色々な魔法に触れて可能性を広げて欲しいという理由らしい。もっともらしい理由だと思っが……。

「喫茶店とはある属性に偏った店だ」

妹喫茶。

つまり、そう言うことだ。

さらに、元管理局で執務官ということもあり、色々な部署とのコネがある。

特に広報部とコネから、現場の女性局員の写真や、ポスターまで横流しされているみたいだ。

その辺り、グレーゾーンであり、一般人に管理局の宣伝になるという理由で黙認されている。

写真集などの売上の一部を談合した上で分配しているらしく、かなりギリギリのラインを綱渡りしているのだ。

それでも、俺が調べるまでこの事実が出てこなかった辺り、ティード・ランスターの手腕は高いと言える。

「ギリギリやな。このティード・ランスターという人物はなかなか、顔の割に腹黒い人物やな」

「厄介な事に、軽犯罪の犯人を捕まえたり、管理局への通報が多いのも事実だ。元管理局員で執務官だった奴が街中で妹喫茶やってるとは犯罪者だっと思わないだろうさ」

民間協力者として管理局に奉仕している事実も隠匿されていたのだ。何故かという談合相手の犯人検挙がこのティード・ランスターの

協力によるものがほとんどであったからだ。

「まあ、談合してしようが、犯人検挙に繋がっているから黙認しているんだろっね」

「はあ。ま、その件はやはりこちらも黙認しておかないとあかんのやろっね」

やぶ蛇になる。

若手で八神はやてを疎む奴らも多い。

だからこそ、この案件は黙認。

「放っておけ。たぶんそれが一番無難だ」

「燃えたわ……」

書き終えた作品は自分でも完成度の高いものだと思える。

「ティアー！」

腐れ縁である。

スバルは私の作品のファンでもある。

そして、正確な作品の批評をしてくれる人物でもある。だからこそ、一番先に読ませる相手に相応しい。

「これ、すつごく良かったよ！ もう、濡れ濡れのグチヨグチヨになっちゃって……」

「聞きたくないことを言わないでよ」

大らか過ぎるのもどうかと思う。
そして、

「目の前でオナツてんじゃないわよ?!」

平然と下着の中に手を入れて私の目の前でヨガっていた。

「えー、だってティアはノーマルだし。今、私の相手になってくれるの?」

レズであった。

おっぱい魔人でもある。

初めて会った時からそうだ。

セクハラはしてくるし、同僚だったら胸を挨拶代わりに揉む。

年下の後輩には遠慮無く、生で揉む事もしばしば。

さらには、部屋では下着姿か、全裸で活動するのだ。

「ふう……。見られながらだと余計に興奮するねっ!」

「早々とイツてんじゃないわよ?! それに私までオカズにしないで!」

オカズを作るのは得意だが、オカズにされるのはあまり慣れていない。

「さあ、次はこれで楽しもうっ」と

どこで手に入れたのか、振動するタイプのマッサージ器であった。

「ち、ちよっと、それ、後で私にも使わせなさいよ?」

評判の良い物だと記憶している。道具を使っ
てするのは初めてだが、それでもスバルの
愉悦した様子から相当良い物だと理解
できた。

どこか変な新人達。
自己を高める新人。

配点：（自家発電）

第十二章 ツインテールとショートカット（後書き）

誤字修正

第十三章 スバル時々なのは（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第十三章 スバル時々なのは

度し難い変態とは誰だと問われればティアナ・ランスターは自信を持って答えられる。

そう、スバル・ナカジマだ。

実の所スバル・ナカジマは人見知りである。

そんな彼女だが、嬉しいことに自分のことを理解してくれる同僚に、ロリとシヨタまで付いてきて、さらに尊敬する人物が二人共々上官に着いたことが彼女の思考をしばし混乱させていた。

「ねえ、ティア知ってる？」

「何をよ？」

訓練中に話しかけられてティアナ・ランスターは自分の采配に何かしら文句でもあるのかと思った。

「エリオとこの前一緒にお風呂に入ったんだけどさ。まだ毛も生えてないシヨタきのこだったよ」

「訓練中に馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ?!」

次いで浴びせられたのは、

「おいおい、訓練中におしゃべりとは余程退屈な訓練みたいだな。よし、頑張っちゃおうかな」

ミウラ・ケイタの残酷な言葉であった。

ズタボロという言葉が似合うのは新人達全員であった。そもそも、機動六課の訓練は他に比べ厳しい部類に入る。少数精鋭であるからその密度は濃いのだ。

「いやー、今日もクタクタだね！」

「なんでアンタはそんなに元気なのよ……」

スバルの元気が羨ましい。

「だって、ティア。この後はお風呂だよ？ ショタにロリと合法的に見れるんだよ?!」

「はぁー。訓練で頭がおかしくなったのね」

元よりこんな感じで頭のネジが緩んでいる相手だったことを忘れていた。

全く、人の気も知らないで、気楽よね。

まあ、ショタの部分は賛同できるけど。エリオのお尻にミウラさんのアレがインしてパンパンに……。

「ティアー。今日はエリオと一緒に風呂遠慮するってさー。なんかミウラ教導官と居残り訓練だった」

ちっ。

まあ、今日は我慢しておこう。

いや、秘密の居残り訓練って結構いいシチュエーションね。やっぱり、ダメダメなエリオをミウラさんが……。

「わー、キャロー。今日もつるつるだね」

「ちょっと待てー！」

純粹無垢な幼女を魔の手から守らなくてはいけない。

せっかくのお風呂なのに、疲れるって私ってエライわ！

「エリオ。まだ踏み込みが甘い。もっと突きのスピードをあげるなら肉体的な加速も必要になってくる。だが、エリオはまだ肉体が成長しきっていない」

「はあ、はあ。そうですね。まだまだ、僕には足りないものばかりですね」

ミウラ・ケイタは感心する。

エリオのひたむきな姿勢。

自分自身にできることを理解しており、その上で出来ることが無い
か探っている。

言わば成長中の花だ。

「肉体的なものは後々付いてくる。今はその下地として技術を磨こう。スピードを活かした戦法、悪くは無いと思うぞ」

「はい！ ありがとうございます」

返事は男そのものだ。

「じゃあ、居残り訓練は終了だ」

「ご苦労様です」

律儀に敬礼を受けた。

「さて、風呂にいくか」
「はい」

きちんと切り分けている辺り、エリオの今後の成長が楽しみな所だ。

庁舎の部屋の振り分けは一人一部屋を使い切りだ、なのは達上官は全員一人一部屋という豪勢な割り振りであった。だが、俺となのはの部屋が隣同士であったのにはさすがに驚いた。はやては俺達の事を認めていない様子であったのだが、やはり仕事上近い方が利便性が良いという判断だろうか。

「ケイタ。来ちゃった」

音符マークが付きそうな口調でさも普通に壁側から俺の部屋になのはが侵入してきた。

「おい、壁は？」
「んー？ 無いね」

高町なのはの得意技、壁抜き。
そうか、壊したか。そうか……。

「ポスターで誤魔化しておいたから大丈夫なの」
「そういう問題じゃないと思う……」

それでも可愛らしい彼女に甘いと自分でも思う。

「バレなければ問題はないの」

言い切った。

それに対して俺の言葉を待たずに、

「んっ」

唇を合わせられた。

攻防としては女の方が攻撃的であった。

唇から舌を這わせて下に移動する。

その筋道を開ける様に手は服を脱がしていった。

とりわけ、口と手で男の物を攻めるのが巧くなっていた。

男のほうは直立のまま相手の成すままに受け入れた。

膝立ちで奉仕する姿を見るのはやはり男としての情欲を満たすものがある。

それでもやはり、互いに気持ち良くなりたい、させたいと思うのが男女の言葉のない意思疎通であった。男は前かがみになって臀部から手を滑らせて秘所を弄ぶ。

負けず劣らずで互いに果てるまで互いにせめぎ合う。

そして、互いに準備が整い繋がるのだ。

高町なのはの人生最大のミスであった。

壁抜きをして風通しを良くしたまでは良かったのだが、朝方にミウラ・ケイタの部屋の扉から外に出て自分の部屋に戻ってしまったのだ。

うっかりミスであった。

それをあろうことが偶然にも早朝訓練の申し込みに訪れていたスバル・ナカジマに発見されてしまったのであった。

「スバル、お願いだから内緒ね？」

「ええ、もちろん、なのはさんがミウラさんとそういう関係だとか思ってませんよ。ええ、夕べはお楽しみだとか、恋人だったとか、スキヤンダルだとか思ってませんとも」

スバル・ナカジマの内情は、憧れの二人の秘密を握れたという喜びに満ちていた。

だからこそ、お願いするのだ。

「うう、どうすれば黙ってくれるのかな？」

「私の願いは、サンドイッチですね」

そう、比喻する。

つまりは、

「3Pでお願いします」

満面の笑みで言い放った。

偶然と必然。

幸運と悲運。

絡まる糸から逃れられない。

配点：（主人公）

第十三章 スバル時々なのは（後書き）

誤字修正

第十四章 初出勤、時々ト変態。(前書き)

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

第十四章 初出勤、時々ト変態。

ガジェットドローン出現。

新人達の初出勤になる。さらに、タイミングの悪いことに新デバイスの初起動と来たものだ。

大体こういった条件が揃うと、いい結果は残せない事が多い。

明らかに緊張する新人達になのはが声をかけていたのだが、心ここにあらずと言った感じだ。

「ミウラ教導官からも何かありませんか？」

なのはからのバトンだ。

フェイトも何故かこちらを見つめているが気にしないでおこつ。

新人達にかける言葉は、

「現場においては頑張るな、努力するな。持てる全て、そう全力を出せ。それで駄目なら生き残るんだ」

常套句として使ってきた言葉だ。

新人達に取っては衝撃的かもな。

フェイト・テストロッサ・ハラオウンは久しぶりのミウラ・ケイタの言葉に懐かしさを感じていた。

うん。

これだ。そう思う。

気力は十分。持てる全力を出そう。

それにしても、頑張るなあ。

まあ、ケイタらしい言葉だ。

いつまでも変わらない不敗のミウラ・ケイタの信条を胸に刻み飛ぶ。

頑張るな、努力するな、なんて初めて聞いた。

そして、生き残れと。

各新人達は胸にその言葉を受け入れる。

思い返せば訓練で死ぬほど頑張って、努力してきたのだ。

だから、出せる全てを出す。

なるほど、シンプルで良い。

全員が言葉を発しず視線を見合わせ、互いに確認する。

皆、同じ思いで飛び出した。

「同じ空は久しぶりだな」

「そうだね。ケイタ」

「三人で飛ぶのって何年ぶりかな」

俺の言葉にフェイトとなのはが反応した。

何年ぶりだっけ？

たぶん三年ぶり位か？

「まあ、その話は置いて、俺は新人サポートだな。なのは達は制空権を確保だ。あれ？俺って何もやることなくね？」

「あはは、いざという時は魔力供給で新人達をサポートだね」

「こっちはフェイトちゃんと二人で十分なの。困ったら呼ぶからね」

いつものことだ。俺は魔力タンクだからなあ。

「じゃ後でな。機械相手に遅れを取るなよー」

「うん」

「また後でねー」

「素晴らしい！」

映像を見て男が両の手を天に仰ぎ、まるで天使の降臨を賛辞する聖者のようであった。

男の名はジェイル・スカリエッティ。

そして、画面の先に見えるのは高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラウン、エリオ・モンディアル、キャロル・ルシエ、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスターであった。

取り分け、分割画面に拡大表示されていた人物がジェイル・スカリエッティの最も興味を引く人物であり、先の言の通りその素晴らしさを褒め称えるに値する男性。

それは、ミウラ・ケイタであった。

本来の狙いである「プロジェクトFの残滓」のことなど毛頭ない様で、ジェイル・スカリエッティは身を悶えさせていた。

「愛らしい、そして、可愛いじゃないか！」

ジェイル・スカリエッティの側に控えていたウーノは冷ややかな目で叫ぶジェイル・スカリエッティを見る。

ウーノが決して言葉に出さないが、心内でこの変態が。と思っていた。

「細い腕、艶っぽいうなじ、折れそうな腰、ハリのある尻、伸びる脚。どれをとっても私の好みだよ！ 男だけどね！ ああ、そんな些細な性別の問題など私には関係のない事だ。私はどちらにでも対応しているからね！」

ウーノ以外の人影は、脱兎のごとく散り散りに部屋を退散していた。逃げ遅れた！

ウーノの失態はジェイル・スカリエッティの側に居たことである。

「ほら、ウーノ。見てごらん。初めてだよ！ こんなにココが男に反応するなんて！」

ズボンにテントが張られておりそれをまざまざと見せつけられたウーノは若干後退る。

ウーノに取ってこのジェイル・スカリエッティの反応は初めてであった。

製造された戦闘機人であるが、人間の女性と作りは変わらず、ジェイル・スカリエッティの趣味か、女性としての生体部分は生身である。

つまりは、見た目通り、なんら人間の女性と変わらないのだ。長年連れ添っているが下半身が元気な様は初めてだ。

ナンバーズ内で囁かれていたホモ疑惑は事実だったのか……。

否、ホモでもあるが正解だとウーノは理解した。最悪ね……。

何が最悪かと言えばジェイル・スカリエッティの存在そのものだとウーノは言うだろう。

「で、どうしたいのですか？」

テントの先が若干湿っている様に見えたがそれを無視した。
触れてはならない事くらいウーノにも分かる。

「うむ、まずは彼が受けか、攻めかによるのだが……。見る限り、さっぱりわからないね！」

ずるっと脚の力が抜けてしまう。

だが、持ちなおして、アホの相手をする。

「では彼を捕らえればいいのではないでしょうかー」

大根役者の様に告げた。

「ふっ、ハーツハツハツハ！ そうだね！ さすがウーノだ！ なあに、捕らえて姉妹達に輪姦させて、後ろの穴も開発させれば、受けになるね！ もしくはお尻の虜になってもらうか！ 夢が広がるなあー！」

初めてウーノは画面に映っている人物を可哀想だと思った。
そして、ウーノ自身も彼を犯す側に参加させられるのだろうと悲観した。

登場、変態ドクター。

無限の欲望は枯渇することを知らない。

配点：（ジェイル・スカリエッティ）

スバルと3Pと思った？ 残念でした。ただの変態でした。

第十四章 初出勤、時々下変態。(後書き)

誤字修正

十五章 個別訓練、個別指導（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

十五章 個別訓練、個別指導

スバル・ナカジマは絶頂の中で得も言われぬ幸福感に包まれていた。上官二人の秘密の共有。

折り重なる憧れの女性と、巧みな技を持つ男性。どちらも美しく頂いた。

むしろ、頂かれたと言ったほうが正確だ。

恥辱に耐える女性に肌を重ねる多幸感。

義務的な、それでも多彩な技で私を導く男性の内面を思うとより、蜜は濃くなるというものだ。

それにしても、男の技はとても素晴らしいものであったと改めて思う。

さすが、不敗の二つ名が付くだけの実力の持ち主だ。

体力に自身はあったのだが、負けたと言える。

男を独占する女を羨ましく思えるが、その寵愛を受けた自分もまた、幸せなのだろう。

公私を分けるのは当たり前だ。

ミウラ・ケイタは関心する。スバル・ナカジマは思った以上に公私を分けれる人物だと分かった。

昨日のあれをどうとも思っていないらしい。

個別スキルの訓練。

公式ロリのヴィータと共にスバルを教える事になったのだが、

「俺って意味あるのか？」

「ハッ！ 防御だったら誰よりも巧いだろーが！」

ヴィータはそう評価する。

まあ、俺は魔力タンクの役割だから身を守る事に長けてると思うが。

「バリアの強度自体はヴィータに負けるけどね」

口調についてはヴィータに限り気にしなくて良い。

そもそも、初対面の時から言葉は緩かった。長い付き合いの中、訓練だろうが、公的な場所であろうが、ヴィータは普遍だ。

まあ、はやての前だと甘えん坊な子供と化するのだが。

見た目以上の年齢のはずだが、管理局内では公式でロリ扱いされている。

一部特殊な男性局員からは合法ロリと揶揄されている。

もちろん、本人にそれを知られたら文字通り潰されるのだ。それをご褒美と受け取る男性局員もいるのだが、その辺はヴィータも諦めているらしい。

「スバル。こいつは防御うめーからな。盗めるだけ盗めよ。特に攻撃が当たる瞬間のバリア操作とかなっ！」

「って、不意打ちかよ」

ヴィータが動き、攻撃が迫る、その瞬間バリアを張って対処した。

これはもう、反射的にできるほど身体に叩き込んだ技術だ。

過去を思いだす。

四六時中、寝てようが、風呂場だろうが、トイレだろうが、攻撃を防ぐ地獄の訓練の成果ともいえる。

その甲斐あつての取得した技術だが、あの時の管理局の協力具合は何だったんだろうな。

過去、ミウラ・ケイタに迫る襲撃、奇襲の裏にはただの嫉妬が付き纏っていた。

理由は明白で高町なのは率いる美少女達と仲が良かったという理由からミウラ・ケイタの訓練協力に賛同した男性局員達が躍起してその命を狙ったのだ。勿論、非殺傷設定ではあるが、殺気は本物であった。

そういった裏事情の元、積み上げられた経験は今となっては不敗の名を与えてしまう結果となってしまうたのだ。

私、今まさに総受けね！
迫る魔弾。

操作する相手は高町なのは教導官だ。
出来ればミウラ教導官が良かったわ。

二人きりの訓練なんて、濡れるシチュエーションだもの。

「はい、雑念ありすぎなの。もう一回」
「すいません……」

スバルが羨ましいわ。

なのはさん、マジ厳しい。絶対この人Sだわ。

何で、私だけマンツーマンなのかしら。

期待の表れととっていいのだろうか。

きつとそくに違いないわ。

キャロ・ル・ルシエは訓練後の高町なのはとミウラ・ケイタの様子を伺っていた。

その様子は仲が良く、羨ましいと思えたのだ。

私ももつとエリオくんと仲良くなりたいと少女は幼いながらも考えた。

それを保護責任者であるフェイト・テスタロッサ・ハラウンに聞くのは当たり前のことであった。

「うん、それはね。セックスすると仲良くなれるよ」

「せつくす?」

キャロ・ル・ルシエは聞いたことのない単語を復唱した。

「うん、そうだね。誰かと、特に男の子と仲良くなるにはセックスが一番だよ。キャロ」

「わかりました。私、エリオくんとせつくすしてみます。所で、せつくすってなんですか?」

その質問にフェイトさんは顔を赤らめて答えてくれた。

「うーん、私が説明するよりも、ケイタの方が詳しいよ。あとね、あまり人前でセックスって言っちゃダメだからね? それは大切な人とするものだから」

「わかりました。気をつけます。せつくすについてはミウラさんに聞けばわかるんですね?」

「すごいなあ。ミウラさんは。何でも知ってるし、とっても強い。」

それに、エリオくんの憧れでもある人だ。

ミウラさんとももつと仲良くなりたいたい。

だから、今度せつくすしてもらおう。

「エリオくん。せつくすって知ってる？」

「せつくす？ 初めて聞く言葉だよ。キャラ、それって何？」

ミウラさんに聞く前にエリオに聞いてみたけど、やっぱり、知らないみたいだ。

「誰かと仲良くするためにすることだってフェイトさんに教えてもらったの。でも、あんまり人前で言っちゃダメなんだって。せつくすについてはミウラさんが詳しいって言ってた」

「なら、ミウラさんに一緒に聞きに行こう。僕も色々な人と仲良くになりたいし」

「うん」

壮大な勘違いと知識を付けた二人は爆弾を抱えてミウラ・ケイタの元へ向かった。

うっかりフェイト。

うっかりキャラ。

うっかりエリオ。

配点：（責任）

いつもながら問題作です。

さて、今回のネタは境界線上のホライゾンネタと知ってる人は知っ

てるものです。

この章で警告が来たら次回の章が丸まるボツになるので困るぞ……。

十五章 個別訓練、個別指導（後書き）

誤字修正

第十六章 最恐の伏兵達（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第十六章 最恐の伏兵達

「あれ？ エリオとキャロじゃない。どうしたの？」

「あ、ティアナさん」

ミウラ・ケイタの部屋までの道のりでキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルはティアナ・ランスターに遭遇した。ティアナ・ランスターは本当に偶然に通路を歩いていた所に二人と出会ったのだ。

ロリとシヨタね。

仲が良いわね。出来てるのかしらこの二人。

「キャロ、ティアナさんも知ってるかもしれない」

「そうだね、エリオ君」

何かしら？

この二人の様子から分からないことを誰かに聞きに行こうとしているようだが。

「一体何の話？」

「ティアナさんはせつくすって知ってますか？」

「ブフオツ！」

思わず吹く。

純粹無垢なこの二人からまさかの質問だ。

「あれ？ エリオ君私変なこと言ったかな？」

「いや、間違ってるじゃないよ。ねえ、ティアナさん。せつくすって仲良くなるためのものなんですよね？」

落ち着け私！

これは何かの罠よ！

「え、えーとお。確かに仲良くなるものよ」

間違いではない。

どこでその言葉を知った？！

誰がそんな事を教えた！

「やっぱりそうだ。フェイトさんの言うとおりだね」

「うん。でもエリオ君。ミウラさんが詳しいって言ってたけどティアナさんも知ってるみたいだよ」

うーんと唸る二人。

フェイトさん……。貴方は間違ってるじゃないけど、間違ってるわ。

それにミウラさんが詳しいってどういうことかしら。いや、まあ、男の人で年齢的にも詳しいと思うが。

「それはね、二人共。よく聞きなさい。私はそれほど詳しいわけじゃないわ。まだ、その、セックスしたこと無いし。や、やっぱり、ミウラさんに聞くのが一番だと思うわ。私も詳しく聞きたいしね」

経緯はどうあれ、こんなに面白そうなネタを見逃す私ではない。

「なら僕達とミウラさんに聞きに行きましょう」

「ティアナさんもミウラさんとせつくすして仲良くなりたいですよ
ね？」

「え?! ええ。そうね……」

痛い。何故か心が痛いわ。

純粹無垢な子供二人はある意味恐怖ね!

僕にもちやんとせつくすできるかなー、とか何て美味しいこと言うのかしらエリオは。

「ふうー。よし、エリオ、キャロ。ちょーと待ってなさい」

窮地だ。ここまで切迫した窮地があっただろうか。

自室で助かった。

何せ、開口一番に私達とセックスして仲良くなってください。と来たもんだ。

明らかに意味を履き違えてる。

そして、素知らぬ顔して笑いを堪えているティアナだ。

アイツは知っていてここまで付いてきたわけだ。

つまり、敵だ。

手招きしてティアナとエリオ達と距離をあける。

有害はこちらで処分しようではないか。

「おい、どうゆうことだ?」

「分かりません」

ティアナはスツパリと言い切った。

「事の経緯は? 発端はお前か?」

「いえ、違います。私もセックスは未経験ですので、どうかご指導ご鞭撻よろしくお願いします」

駄目だこいつ。完全に白を切るつもりだ。

「ミウラさん！ ティアナさんは悪くないんです！ ただ、せつくすしてもっと仲を良くしたいだけなんです」

キャラは盛大な勘違いをしている様だ。

「ミウラさん、僕も皆とせつくすしてもっと仲良くなりたいです」

エリオ、殺されるぞお前。

フェイト、保護責任者としてどういった教育をしてるんだ？

「いいか、二人共。セックスというのは、その、大切な人とするものだ」

「私達はミウラさんの大切な人ではないのでしょうか？ 大切だと感じるならセックスのご指導をよろしくお願いします」

ティアナ……。もうお前は黙ってる。

殺意を込めて睨む。

改めて、どう説明すべきか悩む。

相手は子供だ。間違った知識を与えるのも気が引ける。

かと言って無修正の参考動画を見せるわけにもいかん。

「つまりだな。それは、男女でやるものであって、言葉を大にして言うには恥ずかしいものだから、なるべく、その言葉を言うのは止めなさい。保護責任者であるフェイトに迷惑がかかる」

「僕とミウラさんではせつくすして仲良くなれないってことですか？」

ブツとティアナが吹いた。

それでも必死に笑いを堪えている。

エリオの発言はギリギリだ。

できなくはないが、その趣味は俺にはない。

「エリオ。それはできなくはないが、男同士でそれをするのは少数だ……。そして、二人にはまだ早い。それで仲良くなるには適正年齢が必要だ。残念だが二人がそれを今したら法律違反になる」

「そんなあ……。私、エリオとせつくすしてもっと仲良くなりたかったのに」

「うん、残念だねキャラ。でも、法律違反になるなら適正年齢まで待つしか無いよ」

落ち込む二人。

だが、ティアナはとことん敵だった。

「では私とミウラさんでセックスの手本と方法を二人に教えましょう」

「テメーはまだ適正年齢外だ！」

ティアナの身体だったら出来ると言えばできるが。

既に彼女持ちの俺には関係のない話だ。

「エリオとキャラには確かに適正年齢が著しく足りませんが私は若干足りないだけであり、ギリセーフだと判断できますので、是非セックスのご指導を。そんなに私が嫌いですか？」

さて、このアホは放っておいて。

「エリオとキャラは後10年ばかりしたらきちんとしなさい。正確

には18になってからしなさい。そうだな、今後はその言葉を知り
合い以外には使わないでおきなさい。というか、二度と使うな」
「ええ〜」

三人の声が重なる。

ティアナには説教が必要だな。

意外な伏兵。

灯台下暗し。

配点：（勘違い）

第十七章 ホテル、友人、女難（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第十七章 ホテル、友人、女難

「お話しって何？」

「ああ、フェイト。大切な話だ」

フェイト・テストロッサ・ハラオウンには思い当たる事がなかった。まさか、なのはと別れて私と付き合うという申し出だろうか。

「お前、エリオとキャロにちゃんと性教育してるか？」

「は？」

思わぬ言葉が聞こえた。

「だから、あの二人にちゃんと性教育してるかって聞いている」

珍しく怒ってる。

でも、嬉しいかも。

なのは達に怒った事なんてほんの数回だ。

その貴重な一回を私だけに向けてくれている。

「えーと、正直に言うね？ 私、そういう知識あまりないの。前のアレだって、何ていうか、本能のままに動いただけだし。でもね、アレから調べてちゃんと学んだよ？」

それを聞いたケイタは怒るのをやめて、逆に悲しんだ。

つまり、そういう事だ。

私の親は既にもいない。

そして、幼い頃は母親の命でジュエルシードを集めるだけの機械だった。

その後、なのは達と戦って、捕まって、管理局に入って大切な人に出会ったのだ。

だから、普通の家のような教育は殆ど受けていない。

それを知っているケイタは悲しんだ。

「怒ってごめん。そういや、そうだったな。うん、マジでごめん」
「別にいいよ。仕方のないことだもん」

その言葉に肩を落とすケイタはどこかションボリしていた。

これは、確かバルディッシュの言っていた、弱っている男は押し倒して慰めるべしの状況では？

二人きり、自室。

弱っている男。

よし。

「ね、しよっか」

「は？ 何を」

唇を塞いで押し倒した。

学んだ成果を惜しみなく発揮されるのはどうかと思う。

口で、胸で。

馬乗りの仕方も、締め付け具合も。

どこでどのように学んだか気になるところだが。

さて、慰められたのはどちらだろうか。

罪悪感。

それは大切な彼女を裏切ったことよりも、長年の友の過去を掘り返してしまった事にある。

今回に限りこの事はなには黙っておこう。

罪の対価は払った。

と言っか、強奪されたに近いが。

「まあ、子供二人の性教育は今後ちゃんとするように。フェイトは二人の保護責任者なんだから」

「わかったよ。実体験を元に……。じゃなくて、ちゃんとした教材買って教えるから、睨まないで」

どこか抜けているフェイトだった。

「久しぶりだなユーノ」

「ああ、ケイタ。3日ぶりだね……。それって久しぶりじゃないよね。頻繁に会っているよね」

ミウラ・ケイタはホテルアグスタ警備の為、シグナム、ヴィータらと前乗して重要人物の警護と相成った。

女性が男装してスーツ姿に身を固めているような錯覚に囚われそうだが、ユーノ・スクライアはミッドチルダ考古学会の優秀な学士として名が広く知られている考古学者であり、同時に時空管理局の無限書庫司書長だ。

今回のオークション品物の紹介と鑑定を任されている重要人物でもある。

機動六課の狙いとして、要人警護で不敗の名を持つミウラ・ケイタをつける事が最善の策だと判断したのが八神はやてであった。既知の人物同士、仕事のやりやすさもあるだろうという思惑もある。それに対してユーノ・スクライアは正直、ありがた迷惑であった。幼き頃には高町なのは達と共に戦場を駆け抜けた事もあって自分の身を守る位は出来るのだ。

さらに言えば、ミウラ・ケイタと一泊しなければいけない。時間になると1日半を共に行動することを強要されており、その間に自分の姿が同人誌の糧になってしまうという犠牲が気に入らなかった。表面上、ユーノ・スクライアは友人を冷たくあしらっているが、その実、大の親友としてもミウラ・ケイタを想っている。素の自分をぶつけても良い盟友だ。そして、秘密の共有がある。

「ケイタって裏映像好きだね。いいの？ 彼女持ちの癖にこんなもの持ってて」

「男の嗜みだ」

ユーノ・スクライアの部屋として割り振られた僕の部屋で男同士、軽く映像を流し見ていた。

妙な気分になるけど、映像の中身がそういうものだから仕方がない。

「ユーノって相変わらず赤らめた顔が可愛くて女っぽいよな」

「はあ。こう見えても男なだけどね」

もう慣れた。

慣れていいものかと疑問に思うのだが、生まれ持った女顔は仕方のないものだ。

「僕は先にシャワー浴びるけどケイタはどうするの？」

「俺はシグナム達と打ち合わせがある。明日が本番だが今日に何かあるかもしれないから基本的に交代で警護になるな」

ご苦労なことで。

まあ、いいか。

プライベート空間まで警護されると思ったけどそうじゃないみたいだ。良かった。

いつまで経っても慣れない事というものがある。

ミウラ・ケイタにとってユーノ・スクライアは貴重な男友達だが、同時にその面構えに未だにドキリとさせられる相手でもあった。

同人誌のネタには最高の素材であるのだが、どうも、慣れない。

男色の毛などないが、ユーノ・スクライアを題材にした男の娘作品に群がる同人ファンの気持は分からなくもなかったのだ。

「年を重ねてもなお可愛い。恐るべし、スクライア一族……」

頭を仕事モードに切り替えてシグナム達の元へ足を向けた。

後悔と懺悔

友情と護衛

配点：（不慣れ）

作者です。

色々と未消化の部分は閑話を入れるのでそれまではお待ちください。

ぶっちやけるとこのまま遊びすぎると話数が偉い増えてしまうので
勘弁しろよな

第十八章 敵襲と強敵（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第十八章 敵襲と強敵

ジェイル・スカリエッティ。広域指名手配されている次元犯罪者。

機動六課設立の裏側の目的は八神はやて一同とミウラ・ケイタ以外にはまだ伝えられていない。

そして、ジェイル・スカリエッティの真の目的も彼等には知られてはいない。

「して、ケイタはどう思うのだ？」

明日の警護打ち合わせだ。

シグナムとヴィータと俺。

包み隠さず話せる相手である。

「十中八九、ここに敵が向かってくるだろう」

「そんなこと、なんでわかんだよ」

ヴィータが嘯く。直感的に感じている癖に。

その敵が誰だかはわかっていないようだが。

「ガジェットがレリックと誤認して襲撃があるとはやては見ているが、俺はその裏で手を引く人物がいるように感じるんだ。殆ど勘だが」

新人の訓練と平行して、ガジェットとも何度か交戦しているのだが、シグナム達も感じているだろう。徐々に手強くなってきている。

確実に戦闘データを蓄積してそれを反映させている人物がいる。おそらくは、ジェイル・スカリエッティ。今後もこいつが当面の敵だ。

機械相手に戦略を考えるのは無駄だが、裏で人間が機械を操っているなら話は別だ。

憶測の領域をでない考えはまだ胸に秘めておくとして。

「当たり前前にガジェットが出現をすることを前提で警護を見直したほうがいいと思う」

「うむ。ケイタがそういうのであれば私は反論はないな」

「私もだ。襲撃があつてから対処を考えるより、襲撃があるものとして対処するって考えは賛成だ」

ヴィータ。よしよし。

つい、子供の見かけに騙されがちだが、頭も良いんだよな。

「子供扱いするな！」

そうは言われてもなあ。

警護当口。

「どちゃ？ 綺麗やる？」

「あー、うん。皆似合ってるね。つか、俺だけ普通の支給服ってのもなあ」

「仕方ないよ。私達三人でホテル内の警護は十分だしね」
「ケイタは外回り。というか、気になってるんでしょ？」

なのはの問は正しい。

事前報告をしていたのだが、なのはには憶測であった事まで伝えてある。

ガジェット以外の敵襲の事だ。

本来ははやてにも聞かせ無ければいけないが、憶測で不安を煽るのもできないし、余計な人員を割いて無駄に終わったら責任ははやてに押し掛かる。

「何の話や？」

「ガジェット以外の話。賊が出るかも。でも可能性は低いから俺一人で十分。ガジェットはシグナム達が抑えられるだろうし、ホテル周辺は新人に任せても大丈夫だろう。で、手の空いている俺がホテル遠方、更に周辺を見まわってただけだよ。ラインを借りるって事前報告で通達したたる」

ああ、それか。と、はやては納得したらしい。

ガジェット以外の賊の話は事前報告していないが可能性としては低い。

俺の考えを読み取った上でははやては納得してくれたと思う。

「まあ、その辺は任すわ」

「ああ……」

はやての視線は勝手なことしゃがって。と物語っていた。
これは後々フォローと謝罪が必要かなあ。

嫌な予感だけは良く当たる。

それがミウラ・ケイタの所感であった。

二人の人影。

一人は大柄な男。もう一人は小さな少女。

親子に見えるが、顔立ちからそうではない事は明らかだ。

かと言って誘拐の犯人と被害者でもなさそうである。

骨董品を狙う賊か。

だとしたら、ガジエットの動きを知った上で商品を強奪したと考えられる。

もしくは、偶然か。

それは捕まえれば分かる事だ。

「お前達を窃盗の現行犯で逮捕するが、自首する気はあるか？」

「……」

だんまりか。

「時空管理局の不敗の名を持つ相手にふてぶてしい態度ですー」

リインを連れてきたのは間違いだっただけがする。

「ここは俺が引き受けよう。君は先に引き上げるんだ」

「わかった」

大柄な男が少女を逃がそうとしている。

それを見逃すわけもない。

「その幼女。それ以上動いたら武力行使で拘束するが構わんな？」

「……」

無視か。

ならば仕方のないことだ。
交戦をするために構える。

「その可愛い奴はお前のものか？ 出来れば私に譲って欲しい」

大柄の男に虚を突かれた。

「ハア?!」

「大丈夫だ。大切に扱う。紳士は決してその身体に触れない。そう
だろ？ 同士よ？」

こいつ、何いつてんの？

「同士だと？」

「ああ、そんな可愛い女の子を引き連れているではないか。お主も
真性ロリなのであろう？ 紳士なのであろう？」

「こいつ変態ですー！」

ラインが俺の頭の影に隠れて、大柄の男に指を指す。

「そんなコトはない！ 俺は変態と言う名の紳士だ！」

堂々たる宣言。

啞然と気を取られている間に、幼女には逃げられてしまった。

こいつ、策士だな。

時間稼ぎと言う役割を戦わずして行うとは、なかなか油断できない。
そして、この変態野郎は確実に逮捕する！

「肩に乗せるなんてうらやまけしからん！」

「……………」

「リインはケイタのものですー！ 貴方みたいな変態野郎は願い下げですー」

ツッコミどころが満載過ぎる。

まずリインははやてのだし、変態野郎は何怒っているんだ。

「リインたん！ 俺は変態野郎ではない！ ゼストだ！」

リインを連れて良かったのは相手の名前が分かった事だ。

いや、そこは名乗りを上げるなよ！

「ゼストとやら、大人しく捕まれ……………」

「だが断る！ 俺には成すべき事がある！ リインたんとは暫しお別れだ！」

閃光が走る。

「目眩ましか！」

目が慣れた頃にはゼストの姿は無くなっていた。

「くっ……………。失態だぜ……………」

思わぬ変態に掻き乱されたな。

強奪者との出会い。

まともに相手をするべきか。

配点：（変態紳士）

第十八章 敵襲と強敵（後書き）

誤字修正

閑話01（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

閑話 01

「さて、ティアナ。お前はセックスの意味を知っているな」

「それはセクハラですよ」

子供二人には後日、セックスについての正しい知識を植え付けると
いう話で二人には納得してもらった。

さて、子供二人を返して、コイツには言いたいことが多々ある。

「つまりは意味を知った上でエリオ達を放置したわけだな」

「いえ、未経験ですので。経験者が説明したほうが良いと判断しま
した」

さて、どうしたものか。

ティアナになのはとの関係を言うべきか。

俺が経験済みである事を知らないはずのティアナが何故、経験者だ
と判断したのかが気になる。

「何故、俺が経験者だと思った？」

「はあ?!」

素っ頓狂な声を上げた。

まるで、こちらが変な事を言ったという感じで。

何を言ってるらっしゃいますか。この人は。

なのはさんとミウラさんの仲睦まじくしている様を見れば気付くでしょう。

特に庁舎でオフの時の距離感とか思い切り恋人って雰囲気を出しているし。

気付いていないのは当人達だけだと思う。
公認だと思っていたけど、違うみたいね。

「え、と。なのはさんとミウラさんはお付き合いしてるんじゃないんですか？」

「な、何故それを!？」

驚いた事に驚いた。

「いや、バレバレですって。てつきり私は公認されているお付き合いと思っていました、その反応を見るかぎり違ったようですね」

ちよつと、憶測をちらつかせたら見事に釣れたわ。

というか、ミウラさんも案外純粹で可愛い所があるわね。
人を騙す事ができないのかしら。

「いや、まさか。そんな、俺の偽造は完璧なはず……」

「それ、本気で言ってます？ 私程の慧眼だからこそ見抜けたというわけではなく、普通に男女経験がある人なら気付くはずですよ……。まあ、私は経験無くても気づきましたけど」

純愛系BL同人を長年書いてきたおかげでもあるが。

それでも、あの距離感と仲の良い雰囲気は長年の友人関係というよりは、恋人同士の関係と言った方がお似合いだ。

「どっしりよっつ？ やばいよ……」

「だったら、的を絞らせなければ良いんじゃないですか？」

何がやばいか。恐らく名高い二人のスキヤンダルだろう。むしろ公にして活動した方がいいと思うが、こういう理由^{わけ}が隠さなければいけない事情があるみたいだ。

だとしたら、誰と付き合っているかを絞らせない様にすれば良い。

「……、浮気しろと言うのか?! それは許さない悪徳だ」

「浮気というか、誰かと付き合っている振りをすれば良いんじゃないですか? 例えば、私とか」

「いや、それは……」

「まあ、考慮しておいて下さい。それでは失礼します」

付き合っている振りがやがて、振りで無くなるという話はよくあることだ。

ならば、その為の布石をここで打てたのは幸運だったわね。

とりあえず、脳内メモリに植えつけたミウラさんの困り顔をネタに一つ同人誌を作ろう。

「ここが、地球。なのは達の故郷か……。俺のアースにそっくりだと聞いていたが……」

第97管理外世界現地名称「地球」。

その星の小さな島。

小さな町^{まち}の海鳴市にミウラ・ケイター同はいた。

機動六課任務に当たるロスト・ロギアの出現。それに伴う回収任務だ。

「第97管理外世界、文化レベルB、魔法文化無し、次元移動手段無しって、魔法文化がないの?!」

いの一番に驚いたのはティアナ・ランスターだった。驚くのも無理は無い。

何せ、こんな極局地にオーバーSランクになる人物達が纏めて詰め込まれた様に出現した言わば魔窟である。

「なのは、フェイト、久しぶりー」

金髪の美少女。

アリサ・バニングス。高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラオウン、八神はやての幼なじみで、友達。

地球でも数少ない魔法関係者だ。その様に紹介された。

「何?! 萌え文化だと?! 随分と未来に行ってるな。地球は」

「オタク文化は日本の誇れる文化よ。アニメ、ゲーム、マンガ。それにコミケ。規制はあるけど、上手くくぐり抜けるのを考えるのはこの国の国民のお家芸ね」

「なるほど、コミケとは、興味深い。同人誌即売会か。早速ミッドにも持ち込まなければ……」

アリサ・バニングスとミウラ・ケイタは早くも打ち解けていた。

共にオタクであり、そこに通じるモノがある二人が仲良くなるのは当然のことであった。

その光景に、各新人達はそれぞれの思いを馳せていた。

ティアナ・ランスターはその話に入りたいと思い、スバル・ナカジマはよくもまあ、初対面の人と直ぐに仲良くなれると思ったのだ。一方、エリオ・モンディアルはやはり尊敬できるミウラ・ケイタにますます、敬意を払いう。

あれが、セックスの達人のなせる技。

キャロル・ルシエとエリオ・モンディアルは同一の思いを胸に秘めていた。

高町なのはは複雑な思いと焦りを感じていた。

思わぬ親友の一面と、彼氏の一面を見ながらこれ以上ライバルが増えられても困ると考えていた。

「アリサちゃん。すずかちゃんは？」

「え？ そうね。そろそろ到着するはずなんだけど」

噂をすればなんとやら。

ちょうど、月村すずかと八神はやて一行を乗せた車が到着した。

「ガソリン駆動のエンジン?! マジかよ!」

子供のように車に駆け寄ったのは、ミウラ・ケイタであった。

その姿は彼女である高町なのはですら驚いたのである。

ミウラ・ケイタの故郷であるアースは地球と同じような進歩を遂げた世界であった。

しかし、科学の一面のみは地球よりも進んでいたのだ。

つまりは、ガソリン駆動の車は歴史博物館に展示される程の骨董品であり、環境汚染の面からアースでは電気自動車が主流であった。

環境汚染の法が敷かれたアースではガソリン駆動の車は完全に使用

不可能な代物であったのだ。

それらを知るはずもない高町なのは一行はミウラ・ケイタの子どもつばい一面に虚を取られていた。

「唸るエンジン音！ 汚染物とまで言われた排ガス！ しかも、手動運転か！ ナビ機能は……。玩具程度だな！ 自動運転まで程遠いな！ いや、しかし、これは男の浪漫だ！」

「……誰ですか？」

「ごめんな。私の仲間や。まさか、メカヲタとは……」

苦笑する八神はやてにやつと高町なのはは自分を取り戻した。

「えーと。彼はミウラ・ケイタくん。一応、私達の同僚。あと、アースっていう別世界出身なんだけど……」

どう言葉を続けるか悩む所だ。

車を持ち主の許可無く調べるミウラ・ケイタの眼差しは玩具を与えられた子供だった。

ついにはフロントを開けてエンジンを見始めた。

「アースにはな、こういった旧式の車はもうないんだよ。いや、あるにはあるんだけど。歴史博物館か、展覧会に並ぶ位で骨董品扱いなんだぞ。レアだぞ。レア」

呆れる一同を放置したまま、しばしミウラ・ケイタは骨董品を堪能した。

「ふう……」

一息。
そして、

「君、誰だ？」

ミウラ・ケイタの問は月村すずかに向けられていた。

「私達の幼なじみで親友の月村すずかちゃん。このコテージの提供者でもある民間協力者なの」

「へえ〜。うん。俺はミウラ・ケイタだ。高町なのは達と同僚だ。

まあ、俺もなのは達と古い付き合いでな。たぶん、アリサと君となのは達が別れて直ぐの時期からの付き合いだと思う」

「民間協力者の月村すずかです。気軽にすずかと呼んで下さい」

ミウラ・ケイタは愕然としていた。

表面上は平静を保っているのだが、内心は美人ばっかだ。と思っていたのだ。

ミウラ・ケイタと高町なのはは任務以外にも重要な用事がある。

それは、高町なのはの両親への挨拶だ。

本来の任務は新人達に任せておいて一足先にミウラ・ケイタは将来の伴侶になるであろう人物の自宅へ到着していた。

「緊張してる？」

「うん。どんな戦場に向かうよりも緊張してるさ。だって、な。結婚を前提にお付き合いをさせてもらう承諾を得に来たんだから」

ミウラ・ケイタには初めからその覚悟があった。

だが、今まで両親への挨拶はしておらず。

さらに、婚前交渉までしているわけだ。
いざと言う時の為にも、ミッドチルダの婚姻届も用意してある。
とまあ、用意周到に下準備を万全にしているのだが、やはり緊張の
色は隠せそうにない。

「ただいま」

「お邪魔します」

なのはの両親。

一言あるとすれば、若い。

三人の子をもつ母親と父親とは到底思えない。

「いやー、なのはの兄と姉かと思いました」

「あらあら、ですって土郎さん」

「ああ、若く見られる事はいいことだね。桃子」

未だにラブラブの様だ。

この両親こそ、高町なのはの両親だと感じさせる。

仕事の話、プライベートの話。地球にいない間の話を一通り終えて、
いかにもと言う雰囲気になった。

頃合いだろう。

「えー、ミウラ君。何か重要な話があるんだろう？」

土郎さんが空気を読んで聞いてきた。

流石に覚悟は決まっている。

「はい。俺と、なのはは現在男女の付き合いをさせてもらっていま
す」

「……」

なのはの両親は黙って続きを聞いている。

「ゆくゆくは結婚しようと思っています。今日はその挨拶に来ました。娘さん。なのはと結婚を前提にしたお付き合いを認めて欲しいです」

「……」

「ケイタとは真剣なの。婚前交渉はしちゃったけど。後悔はしてないの」

「おい。なのはさーん。」

味方が大爆弾を落としかがった。

「ふう。恭也は早々に結婚して、美由希はまだ、彼氏の一人も連れてこない。なのはは、結婚を前提にした彼氏を連れてくる、か。親がいなくても子は育つか……」

「そうね。土郎さん……。ミウラさんは真っ直ぐな目をして私達に話してくれたわ。なのはにも、良い人が見つかったって事よ……」

嬉しさが込み上げる。

高町なのはは思う。

やはり私の選んだ人。

その人で良かったと思う。

「それで、お母さんの期待の孫はいつ？」

「え？」

「お父さんも孫の顔楽しみなんだけど……」

私の両親らしいといえば、らしい。

「ええっと。仕事もありますし。そうですね。寿退職するには後一年はかかると思います」

「土郎さん。孫の名前どうしましょう?」

「ああ、後一年しかないもんな! 恭也の孫となのはの孫。どちらが早く顔を見せてくれるかな?」

どうしよう。すっごく期待されてる。

ケイタも後一年なんて余計な言っちゃうから期待を持たせちゃうの。

「いやー、時期相応で子作りしますの。今は重要な仕事があるので。それが解決するまでは待つて欲しいです」

「子作りつて。ケイタ。別に私はいつでもいいんだけどなあ。昨日だって生で中出ししたくせに」

「安全日って言っただろ?! まさか……」

危険日じゃないけど。

「ちゃんと安全日なの」

「あら、なのは達ったら見せつけてくれるわね。土郎さん……」

「なのは。もしかしたら、弟か妹が孫より先かもな」

偉く疲れた。

まあ、なのはの両親が認めてくれた事で一つ大きな肩の荷が下りた。さて、新人達も任務終了したようだし、後はミッドチルダに帰るだけだ。

「なのは」

「何？」

彼女の笑顔。

それが眩しい。

「愛してるよ」

「うん……。嬉しい」

軽いキス。

だが、俺の胸には重い意味を持った誓のキスだと思っ。

決意と覚悟。

誓いと誓約。

配点：（大切な人）

閑話01（後書き）

本編より閑話の方が文量多いってどうゆうことだよ作者！
しるかよ。やりたいことをやっただけだ。

あまりに脱線するから纏めて書いた。今は反省している。
誤字修正

閑話02（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

仕事の後にひとつ風呂という感じで最寄りのスーパー銭湯についたのは良かったのだが、人数が多く姑息にも八神はやては団体割引を使っていたのをミウラ・ケイタは見逃さなかった。

大人メンバー10人

- ・高町なのは
 - ・フェイト・テストロッサ・ハラオウン
 - ・八神はやて
 - ・シグナム
 - ・シャマル
 - ・月村すずか
 - ・アリサ・バニングス
 - ・ティアナ・ランスター
 - ・スバル・ナカジマ
 - ・ミウラ・ケイタ
- 子供メンバー4人
- ・キャロル・ルシエ
 - ・エリオ・モンディアル
 - ・ヴィータ
 - ・リイン（エリオ・キャロ位の大きさ）

「おい、ヴィータは大人料金じゃないのか？」
「私は子供だ」

金の為にプライドを捨てたか。

それともはやての命令か。

さすがに少し可哀想だが、本人が子供と言っているのだからいいの
だろう。

ヴィータに気を取られて足を進めていた為にミウラ・ケイタは入浴
施設の利用規定を見過ごしていた。

男女浴場における児童入浴は11歳以下のお子様のみでお願いしま
す。

- ・高町なのは（砲撃娘）
- ・フェイト・テスタロツサ・ハラオウン（電金髪）
- ・八神はやて（アホ子）
- ・シグナム（女侍）
- ・シャマル（回復薬）
- ・月村すずか（吸血女）
- ・アリサ・バニングス（くぎゅ）
- ・ティアナ・ランスター（貴腐女）
- ・スバル・ナカジマ（機械子）
- ・ミウラ・ケイタ（不敗）
- ・キャロル・ルシエ（召ロリ）
- ・エリオ・モンディアル（槍電男）
- ・ヴィータ（鉄槌女）
- ・リイン（二号）

・砲撃娘：『あれ？　ヴィータちゃんはどこいったの？』

- ・アホ子：『ほんまや。ヴィータ〜！ どこや〜？』
- ・電金髪：『エリオは男湯か〜。キャロ、頭洗ってあげるね』
- ・召口リ：『お願いします。フェイトさん……』
- ・女侍：『主はやて。ヴィータなら用を済ませてから入ると言うてました』
- ・二号：『お風呂の中で漏らされても困るですー』
- ・貴腐女：『あんた、容赦無いわね……』
- ・機械子：『ティア……ここが、理想郷だったんだね』
- ・貴腐女：『うっさいわよ。スバル。あんまり凝視するとだめよ。チラ見しながら記憶しなさい』
- ・くぎゆ：『ティアナさんとは仲良くなれそうな気がするわ……』
- ・吸血女：『アリサちゃん……。今日初めての人だからね。あまり素を出すと引かれるよ？』
- ・くぎゆ：『大丈夫よ。すずか。オタク同士は引かれ合っ！ わー、フェイトー！ 私よー！ おっぱいを揉ませなさい！』
- ・貴腐女：『アリサさんの勇気！ 私は頂点を目指すわ！ シヤマル先生！ お体洗います！』
- ・回復薬：『え？ え？ 何？』
- ・アホ子：『揉み仲間が増えたなー』
- ・女侍：『私とシヤマルを交互に触るのはやめてください！』
- ・砲撃娘：『はやてちゃん、相変わらずなの……』
- ・二号：『持っている人には分らないですー』
- ・不敗：『エリオ、頭洗おうか』
- ・槍電男：『はいお願いします。ミウラさん、いつもありがとございます』
- ・不敗：『別に構わんさ。年の離れた弟みたいだからな』
- ・槍電男：『だとしたら、兄さんと呼べばいいんでしょうか。だっ

たらフェイトさんは姉さんですかね』

・不敗 : 『呼び名はいつも通りにしておこうな。フェイトに対しては姉さんでもいいと思うが……』

・槍電男 : 『そうですか……』

・不敗 : 『気持ち的には兄と想ってくれても良いぞ。それにしても、女湯はうるせーな』

・槍電男 : 『しかたないですよ。人数もあつちの方が多いですし』

・鉄槌女 : 『はやて達の貸切状態だからな』

・不敗 : 『ヴィータ！ 何してるんだよ?!』

・鉄槌女 : 『銭湯なんだから風呂だろ?』

・不敗 : 『いや、男湯だぞ』

・鉄槌女 : 『普通に通れたから問題ない』

・二号 : 『そうですー。私とキャロも普通に通れたですー』

・召口リ : 『エリオ君も頭洗ってもらってるだね』

・槍電男 : 『え？ キャロ？ それにヴィータさんとリンさんですか?』

・不敗 : 『エリオ、頭流すから目を瞑ろうな』

・鉄槌女 : 『……、おい。私達にもつと構えよ』

・二号 : 『女湯よりは天国だぜーです』

・不敗 : 『ほら、ヴィータも頭洗ってやるから来なさい。キャロとリンはもう洗ってもらったな？ そうか。なら風呂にでも入ってなさい』

・鉄槌女 : 『お父さんが板についてるな。ケイタは』

・不敗 : 『うるせー。少なくともお前らは恥じらいを持って』

・アホ子 : 『(ケイタ。ヴィータ見てへん？ 後から来る言つてまだ来ないんやけど……)』

・不敗 : 『(いきなり念話で声を掛けてくるなよ。少しビビった。ヴィータなら……俺に洗われてるな)』

・アホ子 : 『(ハア?! まさか……男湯にいるん?)』

・不敗 : 『(普通に入ってきたけど。ついでにキャロとリンも

いるな……)』

・砲撃娘：『(はやてちゃん！ 魔法で壁を飛び越そうとしないの！)』

・貴腐女：『(必死ね。さて、リンさん。映像は言い値で買い取ります)』

・機械子：『(ティア、ティア。もう少しでなのはさんとはやてさんの理想郷が見えそうだよ！)』

・貴腐女：『(全裸で飛ぶ美少女達……。果たして彼女たちが得るものはあるのだろうか?)』

・機械子：『(ティア。何言ってるの?)』

・貴腐女：『(Jud。そろそろ終わりだと判断できます。』

以上)』

広めよう、変態の輪。

配点：(ネタ回)

最後まで読ませておいてなんですが、この閑話は読まなくてもなんの問題ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7866z/>

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

2012年1月14日09時50分発行